

## 政治に市民常識を！

### 「保守対立」の風化

どの世論調査をみても、支持政党なしのいわゆる無党派層が増え続けている。しかも無党派層は、政党支持率一位の自民党をも上まわっているのが現状だ。ロッキード事件により、あれだけ「自民党の腐敗・墮落」が明らかになったにもかかわらず、支持率を上げた革新政党は皆無である。自民党は悪いと誰もがいいながら、しかし同時に、革新政党にも期待していない。

革新政党は、最近「保守逆転」などという文句を使い始めている。しかし、その実態は、無党派層の増大に助けられた与野党接近でしかない。自民党の支持率が低くなったその分だけ、相対的に接近してきたにすぎないのだ。

すべての既成政党は、なぜ無党派層が増えているのかという問題を真剣に考えていない。というより、問題意識さえ持ち合わせていない。無党派層を簡単に無関心層におきかえて、あいかわらず同じことをいつている。政党の綱領など、どの党も変わらない。中味でちがいがいがないから外見で「ちがい」を演出しているにすぎない。「若さと情熱」「豊かさや安定」「あすの日本をになう〇〇党」など、まったく人をバカにしたようなスローガンをかかっている。これら意味のない既成政党の戦術

は、市民の判断する能力をまったく無視してかかっているものである。

「政治に市民常識を！」という、保守的であたりまえの私たちのスローガンが革新に見えるほど、既成の政治図式はおかしくなっているのだ。

なぜ、既成政党は私たちからかけ離れてしまったのか。そして、私たちにピンとこないところで、すでに風化してしまった対立をくり返しているのか。それは「選挙」を政党にとられてしまったからだ。自民党の「三バン選挙」はもちろんのこと、革新政党も、人手と金をすべて組織に依存している。組織さえ大事にすればという考え、そして、私たち市民を「票田」としかみなさない傲慢さが根づいてしまっている。

それに、既成政党の候補者のキャリアも画一化しており、私たち投票する側と同じ体験を持った人が候補者になれなくなっている。自民党の候補者は、高級官僚と議員秘書と世襲の二世とタレント、社会党は労組幹部、共産党は民青、公明党は創価学会と決まっている。

こうして既成政党は、私たち市民からかけ離れた特殊社会をつくっている。その特殊社会の外堀を構成するのが「選挙」である。この外堀にあたる選挙を、いわれのない「選挙常識」で武装し、私たちを「票田」としかみなさないことによって、特殊社会の温存を図っているのだ。それを超えて彼らに影響力を及ぼす手段を、私たちはほとんど持ち合わせていない。時に市民の側からパイプを延ばしても、特定の圧力団体、労組などに顔の向ききっている彼らの側には、それを受けとめる用意がない。

とすれば、市民運動がとらえたテーマは、その運動をやっている者自身が新しいパイプを政治の

場に延ばさなければなるまい。つまり「支持政党なし」層の輩出に象徴される、革新政党にさえ相手にされない（票田ではあっても政策立案の対象になかなかされない）私たち市民は、自らの手で議員を送り出すことによってしか、国政を身近なものにすることはできないのだ。そのためには、投票する側とされる側という区別をなくすこと、そして、具体的な判断材料としての政策を提供することが必要となってくる。

片岡はいう。

「今回の選挙は、既成の革新の内容対、俺たちの内容だったと思う。だからこそ、政治姿勢を示すだけではなく、政策を掲げることが必要だった」

スローガンをどうする

既成の体制に独自の戦いを挑んでいく私たちにとって、どのような内容、イメージを掲げるかは、きわめて重要なものであり、慎重な議論を要する問題であった。

とくに、私たちの運動を一言で適確に表現するスローガンづくりには、多くの労力を費やした。何人かがどんどんアイデアを出し合い、批判しあう、というブレインストーミングを何度も繰り返した。最終的に残ったのは次のようなものである。

「政治に市民常識を」

「政治に市民感覚を」

「市民の国政参加への足がかりを」

「参加・共和・分権・自治」

私たちのイメージと志向をあらわすこととしては、グループの名前である「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」があり、それと重ならないで、しかも使いやすいスローガンを、このなかから選ぶのである。

「足がかりを」というのは、運動の現況を適切に表現してはいるものの、スローガンとしては少し長いうえ、あまり積極的な発想とはいえないということで、ボツとなった。「感覚」か「常識」かについては、候補者菅の、

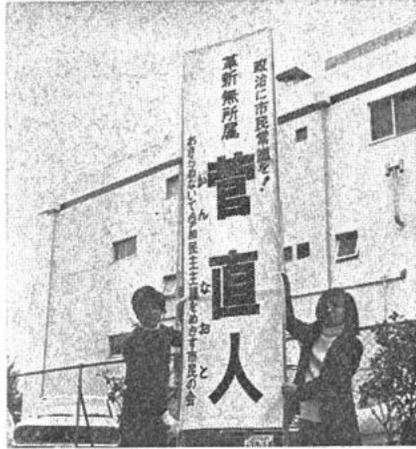
「おまえは市民常識を持っているか、と聞かれれば、まあ持っている、と答えられるが、市民感覚

となると定義もむずかしいし、答えるのがシンドイな」

というつぶやきで、「常識」の方が採択された。

結局最後に残ったのが、「政治に市民常識を」

と、「参加・共和・分権・自治」の二つであった。ここで議論の末、後者には、字面から受ける新鮮さのことばのひびきの面白さがあって捨てがたい、という声が多かったのだが、結局、スローガンとしては「常識」的な前者が選ばれたのである。現在の政治には「常識」のかけらも見られな



立て看板も自分たちでつくった。

い、ということへの私たちの怒りをこめて。

これが、私たちのスローガンを決めるまでのいきさつである。ここで出されたさまざまなことは、やがてビラ、選挙公報のキーワードとして生かされてくる。

#### 政治に市民常識を

主張の内容は、単なる政治姿勢ではなく、政策につながるものでなければならない。こうした認識のもとに、十月初旬から、私たちは主張すべき政策をまとめはじめた。私たちは毎日やっている市民セミナーをはじめ、医療問題やネーダーグループなどの研究会を何種類か持ち、また「理想選挙推進市民の会」や「民主政治をたてなおす市民センター」などの研究会にも参加していた。その中でさまざまな問題点に触れ、さらにいくつかは運動という形でとり上げてきている。

そうしたものを整理するための政策研究会が、小山泰夫をチーフとしてスタートした。そこで主として調べ直したものは、次のようなものであった。

- 行政の公開の制度
- 行政監査制度の各国の現状
- 企業への住民参加の例
- アメリカのSEC（証券取引所委員会）
- 独占禁止法
- 医療問題

#### ○化学物質の安全性

#### ○土地税制

#### ○選挙制度

このほかにも、私たちがこれまでいろいろな場所で知り合い、連絡をとり合っている各地の市民運動グループから「こういう要求を入れろ」という形で政策の提言があった。たとえば、全国サラリーマン同盟からは、サラリーマン減税を税の不正という視点から取り上げてほしいとの要望が出された。

#### 四〇%のアテンティブ・パブリックをねらえ

私たちの考えに共感してくれそうな人々はどうな人か、どのような層の人々を対象に訴えてゆかか、「イメージ」しないと、具体的な表現のスタイルが決定できない。私たちの描く、市民政治勢力の母体となってくれるのはどんな人々か。無党派層とは何なのか。私たちのいう市民感覚をもった人々、市民とは、現在の状況でどう把握したらいいのか。これは大きな問題であった。対象の性格をハッキリ把握していないと、主張がピンボケになってしまう。

菅、片岡、宮城健一（二十九歳）を中心に、この問題について何回か会合をもった。ある日、宮城が一つの調査結果をもってきた。その内容は次のようなものであった。

地域開発問題や物価問題など、多くの市民運動グループが取りあげているテーマに関する政策決定とコミュニケーションの実態を分析すると、五つのグループに分けてみるることができる。

一、制度上の指導者グループ (official policy leader)——政策の立案・計画に係わる部署に所属し、実際的にそれを担当している「役人」と、少数の「議員」で構成される。……有権者の約一%

二、政策・意見エリートグループ (opinion elite)——いわゆる「委員会」の委員を構成するグループ、大学、その他の研究機関における研究者、つまり学識経験者と、官公庁の役人、および企業の実務的指導者のうちの若干、いかえれば指導的実務経験者が含まれる。……有権者の約二%

三、ローカル・オピニオン・サブミッター・グループ (local opinion submitter)——政策決定プロセスには関与していないが、マスメディア、その他のコミュニケーションチャンネルに接近可能であり、それらを通じて意見の表明の機会のある人々で構成される。マスコミ関係者、その他諸団体、市民団体などのリーダー層などが相当する。……有権者の約七%

四、関心をもつ公衆 (the attentive public)——それらの「問題」に関心(不満)と知識をもっており、日頃、マスコミに対し注意をはらっている。そして前に述べた、政策・意見エリートグループやローカル・オピニオン・サブミッター・グループの間でかわされる議論の聴衆を構成する。自分の意見をもっており、その表明の機会を望んでいるが、実際には「代弁者」の出現にそれを託している層である。……有権者の約四〇%

五、一般大衆 (The mass public)——それらの「問題」について、漠然とした不満、不安を抱えているが、それをとりたてて話題にすることもなし、また、外部に伝えたいと積極的には思っていないグループである。

この話を聞いていて、昔は「わかった。私たちの対象とする層は、四番目のアテンティブ・パブリックの層だ。マスコミを通じて、問題を判断する知識があり、自分の意見をもっているのに、表明の機会のない層。これは、私たちの問題意識にピッタリではないか。それに、有権者の四〇%というのも、無党派層の四〇%とダブっていて、なんとなく実感に合っている」

対象となる層をイメージできたあとの作業は順調に進んだ。それを頭に描きながら、主張の表現のトーンやスタイルを決めてゆくことは容易である。オーソドックスに、そして表現のスタイルは多少かたたくても内容を明確に打ち出す、これが、その時の結論であった。



メンを食いながら打ち合わせ。会社じゃこんな  
に働けない。

#### 主張の内容

こうしたさまざまな材料をもとに、私たちは議論を重ねた。そして、主張を三点に分けて整理していった。

#### 〔立候補の理由〕

なぜ立候補したのか、を語ることは、私たちの場合、特に重要であった。この立候補の理由の中に、今回私たちが選挙にいどんだ基本的姿勢があるのだ。

それから「革新無所属というのは何党の公認もれですか」などという質問に対し、私たちの運動の意味をしっかりと認識してもらわねばならない。私たちは、以下のように立候補の理由をまとめた。

「市民常識のかけらさえない現在の政治を『唾棄すべきもの』とかたずけるのではなく、私たちの努力で変えていかねばならない。既成の政党に期待できないならば、私たち市民の手で市民感覚を持った政治勢力をつくる必要がある。それが既成政党に体質変革の刺激を与え、政治に市民常識を取り戻す道である。市民運動の中から仲間を立候補させて、それを支援するという形で積極的に選挙に参加していく市民選挙の拡がり、国政においても、市民参加による政治状況を生み出すことを確信する。市民選挙による市民感覚を持った政治勢力をつくる足がかりとして、私は立候補した」

〔当選して努力すること〕

現段階で自らの力量を客観的に考えれば、国政全般にわたる政策を「公約」という形で主張することは軽々しくひびくだろう。私たちにできる範囲のことを素直に表わしたい。そこで、政策については「努力すること」という表現を用いた。今回の選挙で主張したことは、次のとおりである。

。企業の政治献金の禁止

企業献金に政治が依存することによって金権体質が生まれ、政治の企業支配につながる。この根を断ち切るために、企業の政治献金を禁止すべきである。

。地方分権の推進

地方自治体の財政と権限の自立を図るなど、地方分権化を進めることにより、利権と結びついた「地元利益還元型議員」を不必要なものとし、市民参加の領域を拡げる。

。市民運動の主張するテーマへのとりくみ

たとえば、医療制度・食品公害・税の不正・住宅問題などのテーマを、企業集団や団体の利害からでなく、市民の健康とくらしを重視する立場から追求する。

〔無所属で一人でも必ずすること〕

たった一人の無所属議員が衆議院の中でどれだけの仕事ができるのか。「無所属」と聞いたときに誰もが持つ疑問だろう。私たちは無所属の絶対性をいうつもりはないが、しかし、無所属でもできることはたくさんある。無所属とは、一人一党のことだ。

政党に所属し、採決の際の党の方針にそった「起立要員」でしかない議員よりも、一人でもやれることを必ずやるの方が、より大きな成果を挙げることができる、と私たちは考えた。そして、そのための具体的な方法を明記することによって、そのことを訴えることにした。

私たちの生活が直面する矛盾や諸問題を、市民のなかから、専門的な知識を持った人々がスタッフを組み、市民の論理で政策として立案し、提言していく。

政府は議員からの文書による質問（質問主意書）に対し、文書で返答する義務がある。これを活用し、市民の感覚でとらえた問題を政府に持ち込み、その回答を私たちのグループの機関誌やマスコミを通じて公開していく。

このようにして、国政レベルの政治の進め方や行政のやり方を市民の前に公開する、というオー

## メディアの位置づけ——基本的戦略構想

衆院選挙で利用できる運動手段は、公報・ビラ・ハガキ・テレビ・新聞広告・ポスター、それに直接訴えることのできる街頭演説と立会演説がある。

前に述べたように、私たちは主張の内容を、なぜ立候補したか、無所属一人でもできること、当選したら努力することの三つをポイントにつくりあげた。その中には、できるかぎり「政策」を打ち出し、これまでの政治姿勢を前面に出した選挙を乗りこえようと意図したのである。

しかし、候補者菅は決して「名」があるとはいいがたい。少なくとも、「菅」という男が立候補していること、それを知ってもらうことが先決であり、また「菅」の主張する内容と結びつけて判断してもらわなければならない。

そこで私たちが考えたのは、選挙用の各手段をアイ・キャッチングと内容の主張という二つの目的を満たすために、どのように使いわけるか、ということだった。この点を検討した結果、私たちが与えた各手段の基本的性格づけは、次のようなことである。

内容の主張  
↓  
アイ・キャッチング

- ビラ・選挙公報——主張中心に訴える。
- ハガキ——あくまで補助的手段。
- テレビ——「まともさ」を印象づける。
- 新聞広告——タイムリーさを演出。
- ポスター——立候補していることに主眼をおく。

このような性格づけのもとに、私たち「らしさ」を加味し、新鮮さを盛りこむこと、これが具体化の方向であった。直接訴える街頭演説は、いいたいことを時間をかけていうこと。そうすれば、わかってもらえるし、わかってくれるという思想でつらぬいた。

## 選挙する側もされる側も同じだ

ここで強調したいのは、私たちは選挙する側もされる側も同じだという姿勢で運動を展開したところである。私たちは、選挙を運動の一環として位置づけた。私たちの運動は、市民参加による選挙という状況を拡げることにある。一緒にやろうという発想である。

他の政党候補のように有権者を「投票者」として位置づけることを極力回避した。それは有権者を、観客としての投票者におしやることにつながる。今回の選挙あたりからずいぶん改善されたものの、現行の公選法には、選挙する側とされる側という区別が厳然として残っている。候補者と投票者を区別し、候補者を特別の存在としてみなした上で成り立っている。

私たちは、この区別を乗り越えることが必要だ。そこに、私たちの主張する市民選挙の可能性がある。

## 素人だけのプロダクション

“べからず”から“しない”へ

こうしているうちに、公示日は急速に近づいてきた。基本方針は決まったものの、具体的には何もできていない。「選挙の常識をくつがえそう」というスローガンは、立候補の経緯だけでなく、選挙戦術にも具体化しなければならない。

どうすればよいのか。

昭和五十一年十一月五日、武蔵境の事務所で開催された。午後六時、みんなが仕事を終えて集まってきた。道々考えながら来たらしく、初めからいろいろなアイデアが出てきた。

このとき、私たちがさまざまなアイデアを戦術として採用するかどうかを判断したのは、次のような基準によってであった。

- 一、草の根選挙という運動の趣旨を素直に、しかも効果的に伝えていること。
- 二、「理想選挙」の流れにそうものであること。
- 三、市民常識の枠をこえていないこと。
- 四、新鮮であること。つまり、これまでの選挙の常識をくつがえすこと。

日本の公選法には、かなり細かな規定がある。それも「べからず」ばかりで成りたっているようなものだ。だから、「今の選挙法の枠内で、何がどれだけできるか」「これは選挙法に抵触していないか」といった発想で戦術がつけられてゆく場合が多い。そうすると、どの候補者の運動も同じようなものになってしまう。

そこで、われわれは、選挙法に抵触しないというのは無論のこと、むしろ積極的に「やらない」という発想で戦術を考えた。

選挙というものを、単なる「議員になるための、あるいは議員を送り出すための手続き」ではなく、ある主張が検証を受ける機会であるというふうにとらえてみたとき、一般に選挙戦術として使われているものの中には、目立つことだけに焦点をあてたものが多い。「そんなことはやめよう」という精神で、次のような戦術が採用された。

○連呼はしない

走りながら名前だけを叫び続ける連呼で、いったい何を訴えることができるだろうか。連呼を聞いた人は、どんな反応を示すだろう。「うるさい」「しつこい」だけではないか。これでは相手をばかにしているようなものではないか。意味のあることをやるうという私たちの方針からすれば、当然「連呼はやめよう」ということになる。これは三年前の市川選でも同じだった。

それでは、選挙カーの移動中は何もしないのか。連呼に替わるものはないか、と考えたすえに「スポット」と名づけた作戦をあみだした。これは、信号待ちなどで選挙カーが停止したとき、三〇―六〇秒単位で、短くとも何かまとまったことを訴えようとするものであった。この役に当たっ

た運動員を、私たちは「スポット係」と呼んだ。

たとえば、その一人藤岡郁子の場合。

「皆様、こちらは今回の衆議院議員選挙に革新無所属で立候補いたしました菅直人でございます。菅直人は、一昨年の参議院選挙において市川房枝さんをおつき出した市民運動のグループに推されて立候補を決意いたしました。ロッキード事件に代表される自民党の腐敗しきった金権体質に憤りを感じつつも、既成の野党にも期待できない。そう考えた菅直人は、「政治に市民常識を」というスローガンのもとに、今回の選挙戦をたたかっております。

菅直人、革新無所属菅直人に、皆様の積極的なご支援をよろしくお願いいたします」

○「たすき」や「白手袋」をしない

普通の市民として、あたりまえのかっこうで選挙をしよう。通常の生活感覚にそぐわない「たすき」や「白手袋」はやめよう。それに揃いの衣裳もよろしくない。これらはどう考えても意味のあるものではない。有権者に媚びる行為のように思えたからである。

「それでは誰が候補者かわからなくなってしまわないか」。それも道理だ。たすきの代わりに、仰々しくなく、候補者だとわかるようなものはない



毎日、街頭演説を終えてから議論しながら方針を決定した。

か、ということ、白いバラの造花を胸につけることにした。

○おじぎはしない。手を振らない。

私たちは、お願いをするのではない。参加を呼びかけるのだ。したがって、わけのわからないペコペコおじぎはやめよう。演説の初めと終わりには礼儀としてのおじぎをする。それから手を振るのもやめよう。あれも意味がない。

長時間の議論の末に、このような「○○しない」戦術を決めた。話し合いを終えたのは、午後十一時十分前。みんなそれぞれ帰宅を急ぐ。外は寒風、コートの襟を立てて、誰かがポツンとつぶやいた。「もう冬か……」

捨てられないビラを作る

今回の選挙から候補者個人のビラが使えるようになった。東京七区の場合、八万枚である。選挙法で許されているメディアのうち、一番まとまった内容を主張できるものは、ビラと選挙公報であると位置づけた。では、それをどのように作ったらいいか。

他の候補者のビラは、きつと顔写真が半分以上を占め、「豊かさ」とか「信頼」といったあたりまえの標語を使ったイメージ戦術でくるだらう。

私たちは、候補者の顔写真は紙面の三分の一にとどめ、内容をなるべく多く盛り込む方向にもっていった。ビラについては、菅、片岡、青木守、宮城の四人が、仕事のあと、吉祥寺で食事をしながら話し合った。すでに立候補決定の時点から大幅な遅れをとっていたために、印刷が間に合うか

どうかぎりぎりの線であった。

そうしたあわただしさの中で、私たちの次の関心は、「捨てられないビラを作ろう」「家に持ち帰ってもらえるビラにしよう」ということであった。そのための一つの方策は、内容のあるものにするということである。これは当初の方針と軌を一にする。それにはどんな工夫があるだろうか。

「ビラをもらった場合、自分たちならどうするか」片岡は、そうつぶやきながら、「薄手の紙ならもみくちゃにしてしまう。厚手の紙ならそうはいかない。しかし、折りが大きすぎるとわずらわしい。ポケットにはいるぐらいだとちょうどいい。それに、何か役に立つことでも書いてあれば、一応は家に持って帰る」と続けた。

三つ折りにすること、紙は厚手のものを使うことは、すぐ意見がまとまった。「受けとった人に役に立つ」ためには、どんなものが考えられるだろうか。「選挙区内の施設の一覧表はどうだ。みんな意外に知らないはずだ」「しかし、数が多すぎてビラには載せきれない」「じゃ、投票所の地図はどうだ」「それも多すぎる」というように、さまざまなアイデアが続出したが、結局、スペースの関係で、公示日から投票日までのカレンダーに私たちの運動スケジュールを組みこんだものと、七区の人口を示したものをに入れることにした。

デザインはどうするか。片岡は「カラーにするのもいいが、お金がかかる割りに安っぽく見える」。そこで青木が「一色がいいのではないか」というと、「かなり硬派なものになるかもしれないが、黒一色でトーンを変えて表現するのはどうかか」「しかし、読んでみたい」、「読もう」と思わせるには、一色ではさみしいのではないか」という議論も出たが、「目を見はるようなものよりも、

かえって、その方がいいかもしれない」と菅も青木に賛成した。

### ○「渡し方」と「ピラ」のドッキング

まえにもいったように、個人ピラは今回の選挙法改正で初めて使えるメディアだったので、どのように使えば効果的なのか、まるで見当がつかなかった。

選挙法で許されている配布の方法は、

- 一、新聞折り込み
- 二、立会演説会場の入口
- 三、選挙事務所内
- 四、個人演説会場
- 五、街頭演説会

の五つであった。その中で、不特定多数の人間に大量に配ることができるのは、新聞折り込みと街頭演説の場だろう。他の候補者は新聞折り込みを使うにちがいない。私たちは、新聞折り込みはいっさいやらなかった。費用がかかるということももちろんだが、それ以上に、戦略的な意味をもつ手段として、「みんなに語りかけるものとして使っていこう」と思ったからである。換言すれば、ピラだけが独立したものとして存在するのではなく、他の運動と常に関連づけたものとして利用してゆこうと思ったのである。それが、結果的に受け取ったピラを投票日まで保管してもらうことにつながるだろう。

こうしたことが前提となっているので、渡すときにも無言で渡すのではなく、「市民常識で立候

補した菅直人です」とか、「ぜひ読んでみて下さい」などと語りかけることにした。

これは後日談だが、他の候補者の陣営から「八万枚のピラをどうしました？」と聞かれ、「まあ、どうにか全部まきました」といったところ、「全部？ よくまきましたね」といわれた。たしかに、最終日までかかったのは事実だが、これまでの経験から私たちにあって、「ピラまき」は運動のイロハであると思っている。

ポスターを貼りかえよう

選挙用のポスターは、たて四十三センチ、よこ四十センチのものである。ポスターをつくる段に



「実物よりいい」という評判もあった。

なって、菅は一人の友人を思い出して電話をかけた。「鈴木君？ 久しぶりだな」「やあ、菅君か……」ではじまり、つもる話も程々におさえて、「実はポスター作成に協力して欲しいんだ」「ああ、聞いたよ。東京七区から立候補するらしいな。いいよ、おれも何か役に立てないかと思っていただけなんだ」

鈴木氏は、快く承諾してくれた。持つべきものは友だちである。彼は菅の高校時代の友人で、現在プロのカメラマンとして売り出し中である。

私たちはポスターの使い方についてのブレインストーミングを行なった。「ポスターを壁新聞として使えないだろうか。何回も貼りかえて主張を訴えるものにできないだろうか」というアイデアが出された。「それはおもしろい」ということで、さっそくアイデアの具体化にはいった。

原案ができた。「遠く離れると見えにくいな」とか、「通りすがりの人が、わざわざ立ち止まって読むだろうか。関心のある人なら別だが……」とか、あまり評判がよくない。それに、考えてみると七区のポスター掲示場所は、千七百二十三か所もある。それだけの枚数を何回も貼りかえることが、私たちの力量でやれるかどうかにも問題だった。「千七百二十三か。それは無理だな」ということで、何枚かつくってはいたが、実際には貼らなかつた。

今度は、顔写真と名前を入れたメインポスターの作成である。写真撮影の前に、候補者の菅は、石川しのぶ（二十二歳、事務員）の指示により「前髪三センチ、両横二センチ、後二センチ……」と書いた紙きれを持って床屋へいった。そして、帰ってきて、スーツに着替え、カメラを前に椅子にすわった。これから先は、プロカメラマン鈴木氏の腕の見せどころである。

彼はやはりプロだった。たった一枚の顔写真のために、二百枚も写真をとった。その中から、みんなで手分けして一番よく写ったのを探し出し、決定したが、前ページのポスターである。

ただし、これが菅直人の「いつもの顔」でないことは確かである。やはり二百枚もの写真の中から選び出した一枚は、実物よりよく写っているものなのだ、という声もグループの一部にはあった。

実は、この選挙運動でもう一つ、推薦会用のポスターが使えることになっていった。これは、選挙法改正後、今回はじめて適用されるものだった。よく注意していなかったせいかな、かなり準備が

進むまで「推薦会ポスター」が許されているとは知らず、その作成にとりかかったのは、公示日前になつてからだった。

選挙法の規定にある推薦会ポスターの内容は、「候補者をもつ政治団体は、一人四回まで推薦演説会を開催することができ、一回の演説会には五百枚のポスターが使える」というものだが、そのポスターには、候補者の氏名、写真を入れたり、明らかに候補者を示す用語を使うことは禁じられていた。

つまり、これまで候補者二十五人以上の政党だけに許されていたポスターを、無所属にも使えるようにしたのだが、いくら候補者と直接結びつけてはならないといっても、候補者をまったく連想できないものでは意味がない。

ポスターを見た人に、候補者のポスターと推薦会のポスターをイメージの上で一致させてもらいたい。「これは、菅直人を推薦したグループのものだ」ということが、見た目にも、読んでみてもすぐわかるように工夫をこらした。

たとえば、推薦会の名前である「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」や、スローガンの字体や色を統一したり、枠は赤く、地は白に統一するといった具合である。



ポスター貼り講習会。シワがよらないように貼るには、かなりの技術がいる。

## 新聞広告に収支を出そう

新聞広告は五回出せることになっていた。私たちは、なるべくニュース性のあるものを、その中に盛り込むことにした。どの新聞にするか、曜日はいつがいいかなど、かなり難しい判断が要求される。新聞社の人と話し合った上、朝日一回、読売二回、毎日二回ということにした。

朝夕どちらにするかについては、「確実に読む可能性があるのは朝刊だ。出勤前に読んでいく人が多いだろう」ということで、朝刊にし、紙面は一番読者の目につきやすいということで、社会面に出すことに決めた。曜日は「落ちついて読める」ので土・日曜に各二回ずつ載せることにした。残りの一回は、最後の決め手として投票日の前日に出した。

当初、カンパ目標額とその時点でのカンパ総額、それに支出総額を報告しようと考えた。しかし、新聞社の人から「公費でカンパの要請をすることになるので、目標額は入れられない」といわれ、結局、その時点での収支だけを報告することになった。新聞の広告の規定も、なかなかやっかいなものである。

## ハガキには運動員の署名を入れる

ハガキを選挙戦術として効果的に使うのは、かなり難しい。ハガキは相手を特定したコミュニケーション・メディアである。それも、差出人と受取人が相互に知り合っているという前提で成り立つコミュニケーションである。

ところが、今までの選挙ハガキの使い方は、まるで商品のダイレクトメールのようなものばかりだ。ハガキを受け取る人のうち、候補者と直接面識のある人は少ないはずである。これでは、ハガキを受け取っても、そのままゴミ箱行きというのがオチだろう。

そこで私たちは、「知人(多少の面識がある人も含む)からのハガキなら、読んでくれるだろう」と考え、運動に参加した人々から名簿を持ちよってもらい、ハガキの最後に「私の推薦」という形でその人の署名を入れてもらうことにした。三万五千枚のハガキのうち、できるだけこの方法を使い、残りのハガキについては、地域的には団地などの密集地域、年齢的には二十代の若い有権者と明治生まれの層、六〇年安保を経験したであろう人たち、というプライオリティをつけることにした。

デザインも、顔写真はごく小さくし、内容を中心に黒だけで印刷した。それに、「受け取る相手が当然、菅直人を知っているという書き方は失礼だ」と考え、「私は『あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会』から推されて立候補した菅直人です」という自己紹介から始めるスタイルをとった。

しかし、投票へのキツカケをつくる選挙戦術という点では、その効果をあまり期待していなかった。せいぜい私たちのイメージを強化するという程度である。

宛名書きは、かなりの大仕事だった。

「もう間に合わないのではないか!」というところまで追い込まれて、投票日二〜三日前にのべ五十人ぐらゐを動員し、二日間徹夜でやっと出し終えた。「ハガキ書きはもうこりこりだ」「ペンを見るのもいやだ!」という悲鳴があがった。私製ハガキを使って選挙前から用意しておけば、時間的

にも余裕があったのだから、儉約のために公示になってから選管で受けとった官製ハガキを印刷屋に回したものだから、こんなことになった。

#### TVは難しい

「この候補者に投票しようと思ったのは、何によってですか」という質問に対し、「テレビ」と答える人が非常に多い。テレビの政見放送での候補者のイメージというのは、かなり重要である。そこで、テレビになれていない菅のために十一月十二日、青木守がビデオレコーダー一式を借りてきて、リハーサルを行なった。青木は映画作りをしており、私たちは「監督」と呼んでいる。

まず手初めに、原稿を見ながら強弱、速度の調整をした。これは「それじゃ演説でなく朗読だ」といわれ、次には「トクトクと話す」方法でやってみた。監督は時計をにらみながら「六分十秒。遅い、もう少し早く」などと指示を出す。二回目は四分十秒で「早すぎる」。しかし、これも「情念がこもっていない。主張の迫力に欠ける」と監督から注文が出る。「今度こそは」と何度か挑戦したが、「強くするとアジ演説調になるし、弱くすると説明調になる。どうもその調整がうまくできない」とやや弱気。

リハーサルは何度も繰り返し返された。しかし、候補者もなかなか納得がいかない様子。「テレビは難しい」私たちはしみじみと思った。

#### 選挙カーの回り方

選挙カーは、選挙の一つの「顔」である。今回の選挙で使えるのは一台。それなのに、東京七区はかなり広い。「選挙カー」づくりと「回り方」の研究が並行して進められた。

選挙カーに必要なのは、看板、たれ幕、スピーカー、マイクなどである。私たちの場合、「なるべくお金のかからない方法」ということで、十一月八日から「手製の選挙カー」づくりを開始した。

まず車を手に入れなければならない。乗用車を持つ仲間はたくさんいるが、私たちのイメージにある選挙カー、すなわち候補者が車の上に乗って演説ができるものとなると、どうしても「バン」が必要になる。これを持ち合わせる者は、残念ながらいなかった。

片岡が「バン」を求めて中古自動車の販売会社を歩き、ようやく「ハイエース」を手に入れた。これを小桜一利と青木監督の共同名義で登録した。費用は五十万円也。

次は選挙カーへの機装である。まず宮道寿一（大学助手。通称「ドクター」）が池田勝代さん（武蔵野市議）のところへ行って、彼女が選挙の時に使った看板の材料をもらいうけてきた。普通ならば、七、八万円かけてカンバン屋に注文するところだが、彼は毎日、昼休みと夜を利用して看板を書き、結局、四〜五千円で作ってしまった。

十一月十日、田上と宮道が一日中かかって、車につけるキャリアを探し回り、夕方になってやっと立川で見つけてきた。十一月十四日、つまり公示日の前日、小桜がキャリアと看板を車につけ、宗像がマイクの調整をし、吉田がスピーカーをとりつけて、やっと選挙カーが仕上がった。その出

来ればは、読売新聞の記者が取材にきて、「出来がよすぎて記事にならない」と引き返したほどである。

しかし、一つだけ思わぬ見込み違いがあった。照明は、初めはケチって、無しでいこうと思ったが、実際に、夕方暗くなってから車の上で演説をはじめると、「音はすれども姿が見えぬ」。そこで、急遽、携帯用発電機を使ってライトをとりつけることにした。

次はソフトウェアの検討、つまり、どこをどのように回るか、乗員編成はどうするか、そして一日のタイムスケジュールの作成である。

七区内を最も効果的に回るには、どう回ればいいのか。七区の地図をにらんで考えても、なかなかいい案が浮かんでこない。「七区は広すぎる」。ある日、志田徳子(三十歳、OL)の知人で、偶然菅の住むマンションに仕事場を持っている大学の先生が、この方面にくわしいと聞き、十一月十二日になって、菅と片岡が会いに出かけた。

彼のアドバイスは、「七区は10キロ×20キロで約二百平方キロメートルある。1キロ×1キロを一ポイントとして、そのポイントを毎日一回ずつ回るようなシステムは組めないか」「中央線と武蔵野線とが西国分寺でクロスしている。この線路によって区分される四つの地域内にポイントを設定して、それを毎日回る」というものであった。いずれも適切な意見ではあったけれども、実際に検討してみると、一台の車で、きびしい交通事情の中を回るのとは不可能のようだ。

そこで、この考え方を生かしながら、人口密度を基準にして大雑把に回り方を決めるにとどめ。具体的には「点・面作戦」というものである。

面作戦というのは、住宅集中地域(三鷹・小金井・武蔵野・国立など)ではどのくらいの時間を使うかということ。点作戦は、東村山・東大和など、少し離れた団地群を点から点に結んでそこを何回、まわるかということである。

このように、作戦だけはスムーズに作られていくが、実際に行動を始めてみなければ判断できないことだけに「果たしてこれでいいのか」という不安は常につきまわっていた。



七区は広い。選挙前に現地調査。

選挙カーでの演説は、午前七時～午後八時の十三時間許されている。候補者は、できるだけ選挙カーとともに行動したいが、十三時間べったり車に乗ってしまうと、疲労のために演説の質が落ち、二十日間の運動が続かないというので、「午前七時～九時は駅前で演説と同時にピラマキ、九時～十二時は候補者抜きで、スポーツを流しながら住宅地域を回る。十二時～十六時は商店街、小さな演説会をやり、十六時～十八時は商店街、十八時～二十時は、会社を終えて帰宅するサラリーマン・OLなどを対象に、駅前で演説して一日の総仕上げをする」というスケジュールを組んだ。

## 毎日が遠足のような二十日間

届け出番号は「四」

ついに十一月十五日の公示日がやってきた。準備はどうかこうにか間に合った。いよいよ本格的な選挙戦に突入するのだ。

この日、午前中に都選管への立候補届け出をすませ、それから運動が開始される。

「出たい人より出したい人」という精神で、私たちは推薦立候補の方式をとった。推薦立候補とは、選挙区内の有権者が候補者本人の承諾書をそえて、立候補を届け出る方法である。市川選の時も、この方法を採用した。

一般の候補者は、ほとんどの手続きをとらない。しかし、あとで田中角栄がこの方法で立候補を届け出たと聞いて、私たちはあらためて闘志をかきたてられたものだ。今回は国立市に住む藤本ふみ子を推薦人とした。

届け出には、選管関係の文書すべてを担当した小山泰夫があたり、それに山田喜平が同行した。あらかじめ文書の審査をすませているので、この日は届け出順位の抽選を行ない、文書を提出するだけである。

都選管に到着した二人は、まず本抽選の順位を決める抽選を行なった。六候補の関係者が出そろったところで、本抽選である。

番号のついた箸をひく。「四」番であった。山田は赤電話にとびついた。事務所や選挙区内のほうほうで、ポスター貼り部隊が首を長くして知らせを待っていたのである。掲示板の四番のところに、一斉にポスターを貼っていく。

この日届け出をしたのは、次の六候補である。

福田篤泰（自民）

長谷川正三（社会）

大野きよし（公明）

工藤あきら（共産）

菅直人（無所属）

川田章（無所属）

福田氏は自民党水田派に所属し、現職の郵政大臣、社会党の長谷川氏は都教組出身で勝間田派に属している。大野氏は公明党の国会対策委員長、工藤氏は新人ながら共産党の経済政策委員長をとめる。川田氏は元鎌倉市議で、椎名悦三郎自民党副総裁の秘書をつとめ、分区で十一区にまわった小山市二氏の後継者を名のっている。

菅はこの日、事務所からの届け出番号を知らせる電話で目覚めた。前夜は準備の仕上げで深夜まで打ち合わせがつづいた。

「四番か。七区の定数は四。なんとか四位で当選したいものだ」と考える。そのころ、事務所でも、部屋中に「四」と書いた紙片を貼りつけ、戦いに立ち向かう決意を新たにしていた。

#### 第一声は団地で

「私が今回、衆議院議員に立候補した菅直人です。桜堤団地のこの場所をお借りして、第一回目の演説会を行ないたいと思います」

武蔵野市の桜堤団地に、私たちの第一声が流れた。ここは五十年の武蔵野市議選のときにも何度か来ており、私たちには身近な場所である。政党の候補者の場合は、駅前など人出の多いところに支持者の動員をかけて第一声をやるのだが、私たちはまだその力がない。夕食時に話題になることを願って、私たちは第一声の場所にここを選んだ。

第一日はポスター貼りに人手をとられたため、菅は司会者も兼ねる。彼に紹介されて、初めに青木茂氏がマイクを握った。

「参議院の二院クラブはユニークな政治活動をやっておりますが、私は衆議院に一院クラブがあってもいいと思う。今こそ市民が政治に切り込み、やがては市民党にまで大きく展開する。その第一歩として、菅君の立候補に御支援を」と訴える。

次に武蔵野市議の池田勝代さんが応援演説に立った。池田さんは革新無所属を名のり、有害食品の問題など、私たちと共通するテーマを追っている人だ。そうした地元での活動を織り込んで、た

いへん迫力のある演説であった。

最後に菅が演説を始めた。取材に来ている記者たちが一斉にペンを走らせる。主張の三本柱、すなわち「なぜ立候補したか」、「無所属で一人でも必ずやること」、「当選して努力すること」を順に話していった。まだ調子がでないようだ。冬空は晴れ上がって、風もない。団地内に人影はまばらであった。

「しかし、窓内ではきつと聞いてくれているだろう」菅は、そう考えながら演説をつづけた。

ポスターはせめて二日で貼り終えよう

一方、ポスター貼り部隊は、届け出番号を確認するといっせいに動きはじめた。公営掲示板の「四」の区画に貼るのである。

ポスター貼りは、人手がかかる。何日も前からあらゆる方法で車を手配し、実にさまざまな人に作業をお願いした。事務所に出入りしていた学生、協力を申し出た主婦、地元の住民運動グループの人たち、休暇をとったサラリーマンなどが手伝ってくれる。ポスター、ノリ、ハケ、バケツ、ポロ布、ゴム手袋、ホッチキス、それに選管から配られた地図を持って、二、三人で組をつくって広い選挙区に散らばっていった。

東京七区は十五市を含み、ポスター掲示板は約千七百か所もある。組織やカネのある政党は、さすがに早く、十五日の午前中にはすべてのポスターを貼り終わっていたようだ。ポスター部隊の実感としては、政党と競争で貼っていったのは、最初の三十分ぐらい。あとは、私たちの「四」番だ

けが取り残されていた。

本格的なポスター貼りは、夕方からだった。暗くなってから、仕事をすませたサラリーマンたちが加わって、部隊も増えた。十数台の車が寒風の中に散った。暗い道ばたで、水でポスターの紙を伸ばし、ノリで貼り、ホッチキスでとめる、という作業を繰り返す。深夜、作業をしていたら、警戒中のパトカーがしばらく見つめていた、という報告もあった。選挙妨害とまちがえられたのであらう。

二日間でポスターを貼り終えよう、というのが私たちの目標だった。そのため、事務所に残ったポスター担当者の安江満雄は、五十枚貼れたという電話を受けては喜び、小平市はまだ三割しか貼れていないと聞いては、あせるのであった。夜十時を過ぎると、

「今、あんまり寒いので、お茶を飲んでるんですが、まだやらなければいけませんか」

などという電話が、しきりに入ってくる。それに対して安江は、

「たいへんですが、できればもう少しがんばって下さい」

と心を鬼にして答えなければならなかった。

結局、二日間とも、作業は深夜二時ごろまでに及び、ついに目標を達成することができた。二日間で延べ百名の人間が動いた。

知らない顔ぶれが増えてきた

仕事さえあれば人は集まる、という確信を私たちは持っていたが、実際にはそう都合よく、適

当なときに適当な人材が集まってくるものではない。とくにポスター貼りに延べ百人が動いてくれた直後は、動員力がにぶった。とくにサラリーマンが動けない。昼間の、選挙カーを中心とする街頭戦では、人手不足に悩んだ。選挙戦三日目の十七日になって、法定ビラもやっと刷り上がり、これを配布する人員も必要となってきた。

昼間動ける学生、主婦、それに比較的時間が自由になる仕事をしている人たちに向けて、田上事務長を先頭に必死の人集めが続いた。呼びかけに応じて、学生を中心にポチポチ人が集まり出した。そのなかの大口の参加者に、早稲田大学雄弁会の学生たちがいた。

昭和四十九年の市川選挙のときに、六、七人の雄弁会の学生が参加した。そのとき一年生だった安江は、その後も私たちのグループの一員として活動を続けてきた。彼はこう語る。

「雄弁会は、弁論、研究、実践を三本柱としている政治サークルだ。日常活動は研究会が主だが、会員には、右は自民党青嵐会のシンパから左はトロツキストまでいるし、先輩にも職業として政治にかかわっている人が多く、政治的な刺激が多い。今回の選挙でも、十数人が新自由クラブの方で働いている。こちらの選挙に参加した七、八人の会員も、政治的な主張に共感を覚えて、という側面よりも、どこかの選挙を手伝おうかと考えて、いちばん気軽に参加できるところにきた、という要素が強いようだ。」

しかし、保守系の候補者から八千円とか一万円の日当で誘いのかかる雄弁会の学生なのに、これだけの人数がただ働きをした、ということとは、私たちの運動の主張形態にそれだけのものがあつたということだろう。」

その他にも、小金井の佐野浩さんのグループ、菅のいとこの赤木壮吉・茂兄弟、中央大学佐竹寛教授のゼミの学生たち、雄弁会の北村純の高校時代の友人など、いろいろな関係で参加する学生の数がふえてきた。

こうして、お互いに知らない顔が増えると、コミュニケーションを図る必要が出てくる。その日の仕事が終わってからみんなでとる夕食や、その後、毎晩行なわれるミーティングが、そのための役割を果たした。

### 眠い眠い

選挙期間中、フルタイムで事務所につめていたのは五、六人であった。

選挙事務長は、田上等がつとめた。彼は二十六歳、慶応大学で法律を専攻し、この選挙のために辞職するまで、市川房枝氏の主宰する「民主政治をたてなおす市民センター」で事務を執っていた。

会計事務は藤本ふみ子が担当した。元銀行員で二十四歳。現在は自宅で日本刺繍をやっている。

この二人に加えて、小山泰夫（二十七歳）安江満雄（二十二歳）それに選挙が始まってからは鈴木和夫（二十四歳）玉置春仁（二十一歳）などが事務所につめるようになった。

事務所の朝は六時過ぎにはじまる。前夜から泊り込んだ連中は、七時から始まる街頭演説の準備に忙しい。外で働く運動員のためには、カイロを用意しておく。ドライバークの小桜や「ウグイス・ボーイ」の竹内利寿などが眠そうな顔で出ていくのを見送る。車長は、その日の選挙カーの動きを、七十分おきに電話で報告してくる。

八時から九時ごろになると、候補者の自宅や、宿舍として使わせてもらった小金井の西川さん宅から運動員が集まってくる。ここで再度、この日の人員配置をチェックする。授業に出たがる学生も多く、その調整がたいへんである。

松木康純などは、朝、カイロに火をつけると、毎日の収支報告を事務所の看板に張り出し、朝の駅頭の演説にビラまき要員としてかけつける。九時頃それが終わると大学に向かい、授業が終わると選挙カーを追いかける。夜、事務所に帰り、夕食とミーティング、それがすんでからビラ折り、証紙貼りなどの作業をし、翌日の語学の予習をして、寝袋にくるまってねる、という超人的スケジュールをみごとにこなしていた。

すべての運動員がボランティアなので、行動を強制することはできない。このため、田上らは毎日スケジュールの調整に大汗をかくことになる。

十時前後になると、お客さんが訪れる。じつにさまざまな人が来る。昼ごろになると運動員が集まってきて、昼間の事務所での作業、選挙ハガキの名簿整理・宛名書き・電話による協力要請・投票依頼・法定ビラのビラ折り・証紙貼り・推薦会ポスターのベニヤ板への貼りつけなどを行なう。

昼食は近所の仕出し弁当屋からとる。一食三百円。事務所に泊ったメンバーは、前夜の残りものでもない朝食抜きなので、うまそうに食べる。

昼食後も作業が続く。私たちの仕事は、いつも「どろなわ式」だ。しりに火がついてからあわて始めるくせがある。たとえば、法定ビラは公示日をすぎること三日目になって、やっと刷り上がった。

ピラは三つ折りにする形式になっている。私たちの依頼した印刷屋も忙しいのか、毎日少しずつしか刷り上がってこない。これを機械折りの業者に頼むと、さらに丸一日よけいにかかってしまう。朝夕の駅頭と昼間の団地などで手渡す分が二千枚必要だ。「折り」を業者にたのむと、次の日の分がなくなる恐れがある。そこで、余裕ができるまでは手で折ってしまおう、ということになった。

厚い紙を使ったので、折るのに手間がかかる。証紙のシールも、一枚一枚貼らなければならない。選挙カーからは、朝積んで出たピラを全部手渡してしまっただから、追加をはやく頼む、などという電話がはいる。五時ごろからはじまる夕方の駅頭演説にピラが間に合わず、二百枚、五百枚という単位で、五人も六人も運動員ができるそばから次々と運んでいったこともあった。

万事こんな調子なので、夜になっても仕事はかなり残っている。夕方からきたサラリーマンたちも、終バスの出たあとまで頑張ることがしばしば。彼らが帰ったあとは、人数もぐっと減る。それでも、一日の疲れと寝不足で寡黙になった男たちの作業は続く。とくに公示後数日間、事務長の田上などは睡眠二―三時間という日が続き、それを二―三人分の食事をとることでおぎなっていたのだ。

誰もが必死で仕事をやる一方で、「なんで、オレはこんな金にもならん仕事をやっているんだ」と考え続けた。その答は、選挙が終わって次の運動の展開を考えている今、きつと各人の胸の内にあるだろう。

#### 選挙カーの一日

ドライバー小桜一利の吐息が白い。選挙カーの出発である。朝七時からの駅頭での演説のために目的地に向かうのだ。国鉄中央線や西武新宿線の、乗降客の多い駅をねらう。

七時前に予定の駅に着き、マイクをセットし、街頭演説の標旗を出す。七時になると、菅はマイクをとり、他の運動員は腕章をつけてピラまきに散る。ピラを渡す手が冷たい。

「私が候補者の菅直人です。ただ今、私の主張を書いたピラをボランティアで集まった運動員が配っています。よくお読みいただき、私の主張をご理解の上、ぜひご支持下さい」

というようにことを繰り返し返してしゃべる。足ばやに通る朝の通勤の人たちに、長い演説を聞いてもらうのは不可能だ。ピラと候補者を組み合わせることによって主張内容の伝達をはかる。この調子で九時まで続ける。

これが終わると、菅は個人演説会に出たり、自宅にもどって休憩したりする。車はドライバーとスポットを流す係二人ほどを乗せて、主に団地を回る。赤信号で止まった交差点や要所所に車を止めて、スポットを流す。流し連呼はしないので、すでに通ったところからも、「こちらの方には、こないのですか」などという電話が事務所にくる。しかし、これは仕方がない。

昼食後、菅も車にもどり、団地や西武線・武蔵野線などの小さな駅の周辺で街頭演説をしている。ほとんど毎日のように、サラリーマン同盟のメンバーが応援演説についてくれる。

予定の場所に着くと、スポットを流している間に菅らが車の屋根に上がり、スポット係が菅を紹介して演説が始まる。運動員は、通りかかる人たちにピラを手渡す。朝夕の駅前の演説とは違っ

て、ひと通りしゃべったところで終わりにし、次の目的地に向かう。

夕方五時半ごろから駅前にも車を止めて演説を始める。前述のように、公示後しばらくは照明の用意がなかったのだが、暗いとイメージが弱い、という意見が夜のミーティングで出て、五日目からライトをつけることにした。仕事を終えて会社から駆けつけた片岡が、司会役をとめる。

「ただ今より、革新無所属として衆議院選挙に立候補しております菅直人の街頭演説会を始めます。予想以上に早くきた保革伯仲時代の中で、私たち市民の感覚を政治に反映する力を失った既成政党に、政治を任せておくことはできないと思います。どうか菅直人の演説を最後までお聞き下さい。」

菅の演説の内容も、二十日間の選挙戦の中でだんだん変わっていった。最も特徴的なことは、既成政党を名指して批判していったことである。「既成政党」対「私たち」という選択を有権者にしてもらおう、という意図からである。

選挙法の規定で、街頭演説は夜八時に終わる。片付けをし、付近の商店などにあいさつをして、選挙カーは事務所へ向かうのであった。

#### カンパをボンと五千元

十一月二十日、土曜日。夕方の街頭演説を吉祥寺駅北口で行なう。東京でも有数の繁華街である。週末の夜をすごす若者たちが、三々五々集まってくる。女の子のグループが車上の菅を見上げて「アツ、あれヨ」という感じで肘をつつき合う。ポスターの顔写真が、たいへんできがよく（ある

男性運動員にいわせると、ハンサムすぎて男の票が入らない、ほど）その種の関心もかなり集めたようだった。

このころから、菅は演説の内容を少し変えた。なるべく具体的な問題を語ることにし、とくに薬の使いすぎの問題をとりあげた。また既成政党の問題点を名指して列挙する。やはり、抽象的な話だけをやるよりは、このほうが反応が大きいようだ。

立ち止まってじっと話を聞いてくれる人も多くなってきた。事務所にかえった街頭部隊のメンバーは、「今日は三千五百円」、「今日はなんと一万七千元」というように、街頭で受け取ったカンパの額を喜々として報告するのが日課となった。一日中事務所にももっている者にとって、それは大きなはげみになった。

カンパをしてくれる人もさまざまで、つかつかと選挙カーに歩みよって、だまって五千元札を差し出した中年の男性、「今日は、いいの」とほほえみながら一万円をくれた初老の婦人、また「金、ないんだけど」といいながら、ポケットをさぐって十三円カンパしてくれた若い人。一人ひとりの好意がうれしく、毎日が感激の連続だった。

#### こんな参加者もいた

ある日、事務所に候補者に対するインタビュウ申し込みの電話がはいった。国際基督教大学の学生だという。街頭演説の終わった夜八時過ぎ、事務所にきてくれれば、ということでも田上はOKを出した。

菅は夕食をとりながら「市民とは」「市民の論理とは」といった質問に答える。それが終わって、今度は菅が例の如くオルグを始めた。この学生の名は、西村亜希子。誰かにインタビュールし、それをレポートせよ、という課題が出たところに、偶然街頭で受けとった選挙ビラを見て、菅にインタビュールしようと思ったそうだ。

オルグのかいあって、西村はその後、毎日のように運動にやってきた。これについて、彼女はこんなことをいっている。

「もともと、政治にはあまり関心がなかった。だけど、自分の回りの学生たちは就職とかお化粧とか身の回りのことにしか関心をもっていないのに、この事務所にくると、同じ世代の人たちが、こういう活動をいきいきとやっている、ということがとてもショックだった。運動に参加して、政治を身近に感じるようになった」

もう一人、私たちを大喜びさせた参加者に伊藤千尋がいる。彼女は聖心女子大の学生で、候補者夫人の菅伸子が通っていたフランス語教室のベビシッターをしていた。吉祥寺に住む彼女は、掲示板のポスターを見て「あつ、これは源太郎君のお父さんだ」とピンときたそうだ。この父子、実によく似ているのである。そこで早速、「何か手伝うことはありませんか」と電話をくれた。菅源太郎（四歳）は、ここで一躍男を上げたのである。

#### 活気あふれる事務所

日ごとに運動員が増え、特に学生の参加が目立ってきた。ということは、日々選挙事務所の平均

年齢が下がる、ということでもある。昭和二十一年生まれの菅や、片岡など、まだまだ若いと思っていた者も、三十年代生まれの運動員が何人もいることに気づいて、溜息をついたものだ。

しかし、私たちの選挙では、誰もが完全に対等な立場で運動し、自由に意見を述べ合った。

「ここには『先生』がないんですね」

ひんばんに取材に訪れた記者の言葉である。私たちにとっては当然のことだが、新しい運動員も、誰一人として菅を「先生」など呼びはしなかった。彼らも、「そういう運動なんだ」ということをハダで感じ、ごく自然に「菅さん」と呼んでいた。

役割分担も、半ば自然発生的に生まれていった。公示直後は田上事務長に集中していた仕事も徐



メシが大変。二つの電気釜がフル回転だった。

々に分散され、情報と権限も田上の手を離れていた。街頭演説など、選挙カーと候補者のスケジュール作成は円山順昭（大学院生）、推薦会ポスターの掲示の依頼などは安江、選挙ハガキと開票立会人選定を玉置（学生）がそれぞれ担当し、これで田上もやっと人並みに眠れることになった。

選挙戦も終盤を迎えるころには、彼の役目はマスコミなど外部の応待と、事務長としての判断機能を果たすことだけになり、事務所が一番ヒマなのは事務長だという状態となった。それだけ、若

い運動員がいきいきと仕事をしたということだ。その中の一人で、公示後三日目に安江の陣中見舞いにフラーと現われ、そのまま最後まで泊り込んでしまった玉置はこう語る。

「選挙の感想は、面白かったの一語に尽きる。とにかく、自分の判断で仕事がやれることがすばらしい。参政権とは、与えられた投票だけをやるのではなく、まず自分から働きかけていくということだ。この運動はそれができる場だ」

#### 夕食とミーティング

ある夜のメニュー。

おでん

いり豆腐

野菜サラダ

つけもの

ご飯

毎日二十人から三十人が事務所で夕食をとる。すべて外食にしよう、という案もあったのだが、福田裕子などの「事務所に帰れば暖かい食事が待っている、という気持はとても貴重なものだと思うな」という意見が通り、ご飯だけは事務所で炊き、おかずは菅の自宅などで作ってもらうことになった。

公示前に買い込んだ大鍋を、「銀輪部隊鍋運搬係」を名乗る玉置が昼すぎに自転車で菅宅へ運び、

出来上がったものを、今度は藤本ふみ子が車で持ってくる、というのが日課になった。夕食は事務所内で仕事をしている人間が先に済ませ、街頭演説を終わって八時過ぎに帰ってくるメンバーと交替する。その日の失敗談、自慢話が飛び交い、一日で最も楽しいひとときである。

夕食が終わると、全体ミーティングが始まる。これが私たちの運動の最高決定機関である。実にいろいろなことが報告され、討議の対象となる。たとえば、街頭で手を振るべきか、候補者にタスキを掛けさせるか、こちらから積極的に握手を求めべきか、流し連呼はどうするかなど。

これらは公示前に一応やらないという結論を出していたが、実際の運動が始まり、他候補の運動も見ると、みすみす取れる票を逃がしているのではないかと不安にかられる者もいて、しばしば大激論となった。こうした議論が出ること自体、このグループの運動の殊特性を表わしているが、議論の仕方やはり、他と比べれば独自のものだろう。

意見の採用にあたっては、その内容だけが問題となり、決して候補者だから、事務長だから、古いメンバーだから強い発言力を持つ、というようなことはなかった。

#### 寝袋と修学旅行

夜が遅く朝が早いので、泊り込み態勢は不可欠であった。事務所には二、三人分のふとんと二つの寝袋が用意され、多い時には七、八人が泊った。菅の自宅は事務所から歩いて十分の距離にあり、ここにも三、四人の宿泊の準備がされた。また、小金井の西川信枝さんが結婚相談所を開いているマンションにも三人が泊った。

事務所の寝心地は最悪であった。なにしろ床の上に直接ふとんを敷いて寝るのである。また、どうしても夜の作業が残り、寝るのは早くても十二時過ぎになってしまふ。一方、朝は遅くとも六時半には起きなければならぬので、疲労がどんどんたままっていく。事務所内を禁酒とした田上事務長の英断は、まったく正しかった。これで酒など飲んでいたら、とうてい二十日間は持たなかつたろう。

ある晩、事務所に右翼の来訪があつた。今回の選挙では「黒いピーナツ」シールを選挙ポスターに貼り付ける、という選挙妨害が各地で続発した。彼らはこれに怒つたのだらう。

まず「あのシールはテメエらがやってるんだらう」という、きわめて非紳士的かつ非論理的な電話が、十一時ごろ事務所にかかつてきた。否定論理型の運動を否定し、市民常識をスローガンに戦っている私たちが、あのような手段を使うはずはないのだが、彼らにはそれが理解できない。

この夜は、安江・玉置・竹内の早大雄弁会トリオが事務所にいたのだが、電話に出た竹内が受話器を叩きつけて、

「不愉快だ。右翼です」

と顔をしかめた。電話はこれですんだが、今度は深夜三時ごろになって、入口のドアをガタガタさせる音や、「あつ、ここだ、ここだ」といふ声がした。目をさました竹内は、一一〇番しよるかど電話に手をやりながら、他の二人を起こすかどうか判断に迷つた。男たちは、なおも外をウロウロしている。この日に限つて、入口のカギをしめておいたのが幸いだった。やがて男たちはあきらめて立ち去り、竹内の長い夜も無事に終わったのである。

一方、菅宅に泊つたメンバーの多くは、寝心地のいい部屋があつたにもかかわらず、やはり十分な睡眠はとれなかつた。というのは、藤岡郁子、金子正子の二人の大学四年生と、菅伸子が連夜にわたつて「修学旅行」を彷彿させるような雰囲気を作り出したのである。

候補者はビールを飲んで（ここは禁酒ではなかつた）、選挙期間中の日記がわりのテープの吹き込みをやって寝てしまふ。その後、この女性トリオは夜食をつまみながら、一杯また一杯、つい話が長くなって、気が付くと午前二時、三時ということもすればしばばだった。それでも、朝の駅頭演説に参加するメンバーを除けば、九時ごろに起きればよいため、事務所に比べれば、ここは天国であつた。

最もよく寝たのは、「西川事務所」に泊つたメンバーだらう。寝心地はいいし、誘惑が少ないのだ。朝、西川さんのマンションから事務所に出てくる運動員の顔は希望に満ち満ちていた。

知らないところて知らない人が

人口約百五十万人、有権者約百万人という東京七区で、私たちが短い選挙運動期間中に直接出会える人の数は限られている。しかし、組織のない私たちにとっては、表面的な運動だけでなく、見えない部分での運動の広がりが必要な意味を持つてくるのもまた事実だ。私たちの運動がかなりの成功をおさめることができたのも、間違ひなく、さまざまな人のさまざまな運動のおかげである。

東村山市の主婦で、運動を積極的に支持してくれた相沢さんという人がいる。この人はなんと二度も、見ずしらずの人から「菅さんに投票しませんか」といわれたそう。また、私たちが街頭で

ピラ配りをしていても、実にさまざまな人たち——主婦、サラリーマンから、杖をついたおじいさんに至るまで——に、「必ず入れますよ」などと声をかけられた。こういった声を聞くと、私たちは、この運動が徐々に定着しつつあることを実感し、おおいに励まされた。

#### ハガキ書き狂騒曲

最終戦の焦点は、ハガキ書きだった。枚数は三万五千。十一月十七日に印刷が仕上がってきた。しかし、ハガキ書きはどうしても大量生産するわけにはいかず、一枚ずつ手書きしなければならぬ。そうかといって、私たちに、大量のアルバイトをやとうようなまねはできない。そこで、まずできるだけいろいろな人にお願いで、自分の名前で出してもらうことにした。

この方法は、決して能率があるわけではないが、運動の拡大には有効で、一石二鳥といえなくもない。十一月二十一日から担当の玉置が電話を入れはじめ、二十二日から十枚、二十枚とポツポツ取りにきてくれる人が出てきた。

回収作業に手間取ったり、期間前にポストに入れてしまう人がいたりといったアクシデントはあったものの、最終的には、一万三千枚の名前入りハガキを書いてもらえた。残りは二万二千枚。ここで担当が玉置から北村純にかわる。

自分に任せられた二万二千枚のハガキの山を前に、北村は頭をかかえた。一口に二万二千枚というが、実際に目にしてみると相当なものだ。あと三日間でどうやってこの山を片づけるのか。

とにかく、仕事をはじめなければならぬ。街頭演説の反応にしがたがって、団地居住者のうち、

まず六〇年安保のころ学生だった世代、次に大正・明治生まれの人、最後に新有権者（残念なことだが、前の二つの世代に比べて、政治的な関心が低いという印象を、選挙戦を通じて感じた）を、朝の五時までかかってリストアップしていった。このリストをもとに、議員であろうが、主婦であろうが、記者であろうが、事務所にきた人とにかく十枚ずつでも書いてもらった。夜になると、サラリーマン勢がどってやってきて加勢する。

結局、この日は常時二十名が事務所につめて作業したが、それでも二万二千枚にはほど遠い。北村はまたモウロウとした頭をかかえた。もっと能率を上げねばならない。その夜はついに運動員のガールフレンド、ボーイフレンドにまで電話をして大量動員をかけ、住所の共通部分を印刷するため、事務所の隅でほこりをかぶっていた年賀状の印刷機までひっぱり出された。

かくして、ハガキ書きの最終日十一月三十日がやってきた。朝から事務所中の人間が猛烈なスピードでハガキの山を作っていく。努力のかいあって、この日午後十一時五十分、百枚近くの書きそんじを出したものの、ついに二万二千枚全部を書き終えた。二日間合わせて、動員された者は延べ百人に及び、北村は半分眠りながらローラーを回しつづけた。

中にはかなりきたないハガキを受け取った人もいるだろうが、それにはこういう事情があった。どうか許していただきたい。

#### 反応を肌で感じた電話作戦

選挙運動の種類にもいろいろあるが、人々の反応が即座に返ってくるのは、演説と電話だけであ

る。電話作戦では、推薦会ポスターの掲示の依頼、政見放送の日時のお知らせ、菅論文が掲載された『朝日ジャーナル』のお知らせなどを、投票依頼にからませた。また、特に積極的な相手には、家族や知人への呼びかけをお願いした。しかし、相手が忙しいことや機嫌が悪いこともあり、その反応がストレートに返ってくるので、ときにはきわめて大きな精神的ダメージを受ける。

「こちらは菅直人選挙事務所ですが」「えっ」

「菅直人選挙事務所ですが」

「ああ、選挙の話はもういいよ」ガチャン！

精神的に相当タフな人間でも、これでは立ち直るのにちょっと時間がかかる。

私たちは、まったく何の関係もない人には、電話をするのはよそうと考えた。電話作戦に使った主な名簿には次のようなものがある。

『シビルミニマム』読者

市川選挙の協力者

田中栄の選挙の協力者

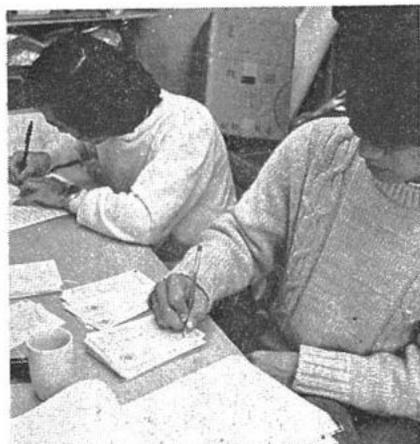
菅の出身校、東工大のOB名簿。

これらの名簿は、割合に質がよく、十人のうち三人か四人からは、色よい反応があった。しかし、その後は、運動員の同窓会名簿など、実質的に無作為抽出と変わらないものを使った。

これはやはり反応がよくない。七区の場合、十万票を超えれば（菅が大量得票すれば当選ライン

が下がるので、当選が可能になる。だから、有権者百万人に対して十万人、つまり、十本電話をかけて、そのうちの一人から確かな手応えが返ってくれば一応の成功といえる。このように、言葉でいってしまえば簡単だが、実際に十本電話をかけてたった一人からしか好意的な答えが返ってこない、その心理的な消耗はたいへんなもので、選挙運動の中でこれほど疲れる仕事はないのではないか、と思われたほどである。

こんなこともあった



選挙用ハガキ担当の北村純は、その効果を疑い、つつも不眠不休でがんばった。

ある日、菅が吉祥寺駅北口で演説していると、共産党の地区責任者と名乗る男が、菅選対の責任者に会いたいと申し入れてきた。司会をしていた片岡が応待に出ると、

「もうすぐ工藤候補の車がくるので、三十分間の場所をあけてほしい。君たちはずっとここを使っているのだから、別の場所へ行けばいいではないか」という。

片岡は、

「私たちは、いつもこの時間に駅前で二時間ぶつ通しの演説を行ってきた。その間に他の駅へ移動すれば、それだけで三十分ぐらいかかってしま

う。もし工藤候補がここで演説したいなら、十五分ずつ交替でやろうではないか」と答えた。共産党の人は一度ひきあげたが、しばらくしてまた、何としても三十分間あけてくれ、といってきた。今度は哀願調だ。司会と二役で忙しい片岡は、いらだちながら、

「七四年の参院選のとき、新宿で共産党の候補者と市川候補がぶつかった。そのときにも十五分ずつという方式をとった。選挙というのは、候補者をどれだけ効率よく動かすかにかかっている。だから、それぞれが十五分ずつムダにするのが公平だろう。有権者は両方の候補を比較したいはずだ。公開討論会でいこう」といって話を打ち切った。

共産党の人は、不満げではあったがそのままひきあげ、相前後して工藤候補の選挙カーが駅前広場に入ってきた。マイクを握った片岡は、

「これから十五分ずつ、両候補が演説を行ないます。ぜひ既成の政党と私たちの運動の主張を比べていただきたいと思います」といって菅にマイクを渡した。しかし、工藤候補の選挙カーは、数分後、静かにその場を立ち去った。

終盤に近づいてから同じような出来事が三鷹駅前でも起こった。この日、菅は立会演説会に出かけるため、夕方六時半から七時半まで、選挙カーを離れた。他の陣営は、候補者がいなくなると連呼だけになるが、私たちは入れかわり立ちかわり、一時間ぐらいいは運動員の演説でうめてしまう。

たまたま三鷹駅前には、保守系無所属で立候補していた川田章候補の選挙事務所があった。私たちの演説が続くうちに、川田派の運動員は黙っていられなくなったらしく、連呼を始めた。

私たちが「マイク合戦になってしまったので、少し休む」とスピーカーで流すと、むこうもすぐ

やめてしまう。それでは、とこちらが始めると、相手もまた始める、ということが二、三度続き、ピラ配りをしていった北村純が、川田派の運動員と口論を始めた。そこへ川田候補が立会演説会から戻り、川田候補を乗せた選挙カーは駅前を出ていった。

### 「月光部隊」活躍す

選挙戦を通じて他陣営とのトラブルは、きわめて少なかった。中盤以降、新聞社の調査結果などに表われた菅の「善戦」も、社共両党などの内部引き締め材料に使われた程度で、無風選挙区に波風を立てるまでには至らなかった。もともと菅はまったく無名であり、非難中傷の材料がなかったこともあるだろう。ただ、選挙妨害ということでは、実にひんばんにポスターを破られた。

各地で「黒いビーナッツ」と書かれたシールがポスターに貼られる、という事件が起こったせいもあるのだろう。警察や選挙管の見まわりも厳重で、ほとんど毎日、私たちの事務所から各市の選挙管からポスター破損の連絡がはいる。七五年の市議選の経験から、よいムードになってくるとポスターが破られ始める、ということが私たちには分かっていた。市議選のときには終盤になって破られたのに対し、今回は初日から破られるケースが続いた。一方で、そのことを喜びながらも、毎晩、貼り替え作業のために広い選挙区を走り回らねばならず、たいへんな作業となった。この貼り替え部隊を、私たちは「月光部隊」と呼んだ。

破る人は「きれいに」破ってはくれない。一部残っている上に、また別のポスターを貼る、というのは、なかなかコツがある。「月光部隊」は作業中に警戒中の警官から声をかけられ、貼り終わ

るまで見張られたことが何度もあった。

ほかにも選挙妨害というほどではないが、愛嬌程度のイタズラでもおもしろい話がある。

ある日、事務所に若い女性から電話がかかってきた。

「あなたたちの運動を新聞で知りました。私は武蔵野女子美大の学生ですが、クラスを中心に三十万円のカンパを集めました。あした、学校まで取りにきてくれませんか」という。

「ホントですか」と、電話を受けた安江は喜んだ。ただ、武蔵野美大、女子美大はそれぞれ存在するが、「武蔵野女子美大」というのが実在しないことに若干の違和感を感じつつ、

「事務所も人手不足で、ちょっと受け取りにはいけません。カンパの集め方なども教えていただきたいし、こちらにおいて下さいませんか」と返事をした。

この話はたちまち事務所じゅうに伝わり、夕食のときの話題も「女子大生の三十万円」に集中した。

さて、翌日、約束の一時を過ぎても、三十万円と女子大生は姿を見せない。安江は田上らの嘲笑にもめげず待ち続けたが、ついに彼女は表われなかった。かくして、このイタズラ電話は、二日にわたって事務所の話題を独占した。

## 雰囲気が変わってきた

### 変わったマスコミの姿勢

今まで述べたような次第で、名もなく金も組織もない私たちの衆議院選挙への挑戦は続けられた。しかし、無風選挙区といわれる東京七区での素人の立候補である。初めから、私たちの期待する反応が得られたわけではなかった。

取材にきたマスコミの記者の姿勢も、初めのころは興味本位に見えることがしばしばであった。市民グループが素人を立てて選挙をするという「話の面白さ」に対しての取材が多く、このグループが何を考え、どういうことから選挙をすることになったかという点については二の次であった。中には「だいじょうぶですか」と、気が気でないといったふうに問う記者もいれば、多少あなどった様子で、何を聞くにも「自分にはわかってるんだけど、まあ答えてみな」という態度も見受けられた。

しかし、次第に協力的になり、私たちをまじめに取り扱う姿勢が見えてきた。「君たちのところは取材していて面白い」という声が増えてきた。彼らは職業上当然、さまざまな選挙事務所を訪れているが、そこでは、マスコミ係ともいべき人の模範的な表向きの解答が戻ってくるばかりだ。

そういう意味では、事務所を回ってその解答用紙を集めるだけであり、面白くも何ともないという。

ところが、私たちの場合は違っていろいろらしい。だいたい、そういう担当者がいない。前もって連絡がある時は別だが、そうでなければ、そこに居合わせた連中が取材の相手になる。だから、記者の一つの質問に、あらゆる方向から、時にはまったく違った答が返ってくるのである。それに、事務所では候補者も事務局長もなく、一つのテーブルを前に数十名のメンバーが「連呼はどうするか」とか、「明日はどこを回ろうか」といったことをワイワイガヤガヤ話し合うのであるから、驚きであつたであらう。

こういう私たちを見て、マスコミの人たちは、ますます興味を深め、最初は私たちには見られないような突飛な選挙運動を期待したらしい。しかし、私たちの選挙運動は理想選挙そのものであり、決して奇をてらうようなことはしなかった。それに、主張の内容がまともであり、私たちの対応がまじめで、本音を出して接していることを認めるようになっていった。

私たちに接する時の態度も熱心で、質問も「どうですか」と見解を求めるようなものになってきた。また、私たちの作戦会議中に折り合わせたような時にも、真剣に耳をそばだたせているのであつた。

#### 共感してくれた同世代の記者

取材時の態度が変わるとともに、彼らは私たちの運動に共感し、協力してくれるようになった。

中でも、同じ世代の記者の協力ぶりは、私たちも驚くほどであつた。

アンケート調査の結果を知らせてくれたり、「駅前で菅さんの演説を聞いたが、医療問題の話が多過ぎるのではないか。あの演説だと、聴衆が立ち止まっても何のことかわからんんじゃないか。もっと派手なジェスチャーをまじえたら」と、アドバイスしてくれたりもした。中には、私たちが事務所でビラの証紙貼りなどをしていると、それを手伝ってくれる人もあつた。選挙の結果に対しても、比較的淡々としている私たちに對して、とても記者とは思えないほどの興奮ぶりで、次点という結果を本気になって惜しんでくれたのも彼らであつた。

どうして、私たちにこれほどまで共感をもつたのであろうか。某新聞記者は、次のような感想をもらしていた。

「自分と同じく大学闘争をくぐり抜けてきた世代の良識派グループが、現在も活動を続けているということに驚嘆した」

新聞記者の三十代と言えば、地域のキャップを担当する年代である。その記者は、「どうして、もっと早くこのグループの存在を連絡してくれなかったのか」という。そして、「僕はサラリーマンになってしまった。今は組織の中に取り込まれているから、自分がここで何かをやるといふことは考えられない。動きかけがないんだ。自分がやるんじゃないやなくて、ついつい見る側にまわってしまったるんだ」と小声で打ち明けていた。

さらに別の記者は、菅に「どうして今の職業を選んだのか」と聞いた。菅が、「比較的自由な仕事を捜して選んだのだ」と答えると、

「いやあ、そりゃ、まちがってなかったですよ。僕は動こうとしても自由に動けないんだ」と語っていた。

毎日のように取材にきていた記者は、短期間のうちに運動の盛り上がりを感じていたので、投票日までには、もっと支持が拡がるだろうと見ていた。しかし、実際の紙面では、上の方で調整されるらしく、「政党候補にはとてもかなわないであろう」という論調で、「七区は無風区」という表現は最後まで変わらなかった。

分区によって七区から分かれた十一区が「激戦区」として七〇%を上回る投票率であったのに対し、七区のこのような「無風区」扱いが、有権者に「投票しても変わらない」という感じをいだかせたのか、七区の投票率（六一%）が前回の衆議院選より低下し、東京唯一の低調選挙区となったのは、残念であった。

#### 終盤になって強まった反応

率直に言って、二十日間という短い期間で、これほど盛り上がるとは思っていなかった。

周囲の反応が運動員の士気に及ぼす影響は、はかり知れないほど大きい。投票日の一週間ほど前、ある新聞社のアンケート調査の結果、菅の支持率は約一〇%だという情報はいった。このときは、連日の疲労がたまって意気消沈気味だった運動員の顔が急に明るくなり、それが最後まで運動をやりとげる原動力になった。

ここで、具体的にどのような反応が出てきたかを、簡単に述べておこう。

#### 街頭演説

当初は、菅を知らないか、あるいは知っていても興味が無いというふうにはチラッと見て通り過ぎる人が多かったが、選挙戦も中盤になると、選挙ポスターなどで名前と顔が一致しはじめたのか、「ああ、あれだな」といった視線を感じるようになった。また、はじめは、演説内容よりも、菅と市川房枝氏をセットで知ることにとどまっていたが、次第に、何をするんだろうといった興味が出てきたらしく、ピラひとつでも積極的に手を出す人が多くなり、それにつれて街頭カンパも活発になった。

同世代のサラリーマン風の人が、わざわざガードレールの上に登って菅に握手を求めたり、また車イスの人が熱心に演説を聞いたあとカンパをしてくれたこともあった。この人は、菅が立候補したときから菅に投票しようとしていたといい、

「今日は演説が聞けてうれしかった。落選してもいいから、これからは運動だけは続けて欲しい」と激励してくれた。

#### 電話での反応

事務所にかかってくる電話には、「革新無所属」ということに関するものが多かった。「保守系無所属なら自民の公認もれだが、革新無所属というのはいったいどこの公認もれなんだ？」とか、「無所属で何ができるのか」といった内容のものもあり、はじめのうちは「無所属」の説明から話を始めなければならなかった。

後半に入ると、次第に激励の電話がふえてきた。その内容も、「いま、学生時代の名簿をもとに菅に入れると電話しているんですよ」とか、「今日、会社で菅さんのことについて話しましたよ」といったものが多く、ここでも運動が拡がりつつあるという実感を強めた。

### 立会演説

立会演説会には、最初から興味をもっている人たちが集まってくるわけであり、また候補者の中には、支持者に動員をかけている人もいる。しかし、そうした中にも、演説が終わってから「もっと君のことを知りたいので、ピラを下さい」とわざわざ訪ねてくる人も多く、また「こいつに決めた」とつぶやく人がいたことを、運動員の一人が耳にしたこともある。菅の演説が終わると、席を立つ人の姿もめだつた。

こうした反応の盛り上がりは、候補者をはじめ参謀格の連中の心をも微妙に変えていった。「惨敗」の不安は日を追って薄れ、終盤には、「もしかしたら」という可能性も出てきた。「当選した場合にはどうするか」ということを、本気で「心配」したこともあった。片岡はこういつている。

「選挙の二十日間というのは、実におそろしい期間だ。最初は、こんな短期間のあいだにどこまで浸透するのかわかると、かなり不安だった。ところが今では、あと一週間あったら当選していただろうと思うほどだ。正直いって、ずいぶん浸透するもんだなあと思う。ぼくたちの場合、やればやっただけ確実に支持者がふえていった。選挙について何も知らないぼくたちがここまでやったのに、他の陣営はあの程度のことしかやれなかった。アメリカの大統領選挙のように長期にわたるものをやれば、誰にも負けない自信がある」

「組織選挙では、人間関係があらかじめ決まっています、それをどこまで押さえることができるかという歩どまりの発想だが、ぼくたちの場合は、人間関係を拡げていくという拡大発想だ。今回の選挙で、この拡大発想でもやれるんだという自信がついた」と、菅も感想をもらしている。

### 七万一、三六八票——次点

十二月四日夜七時を少し過ぎたころ、選挙カー部隊は吉祥寺駅頭についた。四日は公務員のボーナス支給日だ。そのせいか、初冬の冷気が漂う街には人があふれている。



最初はライトをつけなかったのですが、夜になると「暗闇から声」になった。

演説の準備を急いでいるそばを、コートのえりを立てて足早に人が通りすぎる。時おり、私たちのほうにチラリと視線を投げてゆく。マイクがのび、照明用のエンジンが動き始める。車の上には、候補者の菅、片岡、そして青木茂氏の三人の姿が照らし出された。これから、最後の演説が始まるうとしている。

司会の片岡がマイクを握る。遠まきに人が集まってきた。五十人、七十人、いや百人はいるだろう。それに、この夜だけは、仲間の運動員たちの

顔も見える。

「私はこういうことを聞いたことがあります。日本のインテリ、いや自称インテリという人は、あれもだめだ、これもだめだ、とばかりいつていて、投票を棄権している。しかし、田中角栄の後援会である越山会の人たちは、決して棄権しないだろう。しょっちゅう棄権している自称インテリと越山会の人とは、この民主主義の社会において、どちらが力を持つだろうか。あれはだめだ、これはだめだというだけでは、決して政治状況は変わりません。私はやはり積極的に参加してゆくことが、こうした状況を変えてゆくのだと思います」

最後の街頭演説を、菅はこう切り出した。今では彼も聴衆の顔を見ながら話せるようになっていた。話しながら、これが最後の演説であるという思いが去来したのである。終わりに近づくとつられて、声の調子が高ぶっていった。

つづいて青木氏がマイクをとる。

「みなさん、あと三分でございます。自民党の票を一票でも減らすことによって、世界の良心から持たれているところの疑惑を晴らしましょう。そしてまた、党利党略に明け暮れて国民のくらしを良くすることを忘れてしまった野党にも、反省を求めようではありませんか」

そしてまもなく八時。司会の片岡が「終わりのあいさつ」のマイクを手にした。「私たちの選挙は、カンパとボランティアでやっております。菅直人の主張に、そし私たちの運動の趣旨にご賛同いただける方は、ぜひ菅直人に投票していただきたいと思ひます。これで街頭演説を終わります。ありがとうございます」

拍手が起こった。こうして、最後の街頭演説が終わったかに思えたとき、候補者菅は、片岡の手からマイクをもぎとり、「最後に一言だけいわせていただきたい」と、打ち合わせにない演説を始めていた。

「私は、この選挙運動をやってきて、いま大きな喜びを感じております。私たちが選挙運動を始めようとしたときには、事務所もなければ組織もなかった。金もカンパで集まるだろうという期待の中にしかなかったのです。それが、この二十日間のうちに非常に大きな拡がりとなり、私たちの仲間がふえてきています。

私は、今回の選挙を、この運動をやるうとしたことが、間違いはなかったと痛感しております。明日は、皆様方の政治に対する怒りをぜひぶつけていただきたい。できれば私の名を書いて、もし他の人を支持しているのであれば、その名前を書いて、ぜひ積極的に選挙というもので怒りをぶつけていただきたいと思います。

これからも、皆さんの協力を得て、いろんな形で市民運動を拡げていきたいと思ひます。どうもありがとうございます」

さらに大きな拍手がわいた。八時を少し過ぎていたかもしれない。車上の照明が消えても、人々の輪は、しばらくはくずれなかった。

とにかく、私たちの市民選挙も、こうして終点にたどり着いた。

東京七区は翌日開票区である。開票結果は六日になるまでわからなかった。しかし、私たちは、数日前に新聞の調査結果を聞いていた。それは、支持率が九十一％というものであった。だか

ら、グループのリーダーには、およその見当はついていてた。ただ、私たちの運動は、終盤に近づくにつれて反応が非常に強くなってきているのを実感していたから、終わりの数日で、もっと伸びるかもしれないという期待はあった。

六日早朝からテレビの開票速報が流れた。午前中の段階では、かなり善戦していた。しかし、昼過ぎになって、四人の当確が決まった。菅は次点であった。

そのとき、選挙事務所には、菅を含めて五、六人が寄り合っていた。開票結果が知らされたときにも別段、空気は変わらなかった。前日の投票率が六〇%とわかった時点で、すでに当選はないものと思っていた。予想が裏づけられたにすぎなかった。

これで運動がつづけられる

私たちの選挙は、こうして終わった。吉祥寺での菅の最後の演説にあったように、私たちは運動の拡がりを実感して、新しい状況の可能性を立証できたということに自信を深めた。「勝ち残れた、これからも運動がつづけられる」——これが最も大きな成果であった。

今回の選挙に協力してくれた人も、思いは同じであったようだ。青木氏と古宮杜司男氏は、次のような手記を寄せてくれた。

「菅直人君と共に闘って」——全国サラリーマン同盟代表 青木茂

正直いってたいへんびっくりした。誰が考えても無風地帯といわれる選挙区に、組織も金もネー

ムバリユーもなく突然立候補しようというのだから、卑俗的な常識からいえば無謀も甚だしいということになる。

しかし、レディ・メードの政治の中でむくわれるところが全く少なかった庶民大衆の希望をいささかでも代弁してくれるグループがほしいということとは、時代の要請であるには違いない。

この意味で、菅君の選挙は勝敗はともかく、みじめに負けてもらっては市民運動にたずさわるものとしてはたいへんこまったことになる。だから、一票でも多くとってほしいと私は私なりに努力はした。

しかし、腹の中では五万とれば上等という皮算用をしていただけに、七万の票がとびだしてびっくり仰天だった。

実質的には大勝利である。政治に新しさを求める国民の潜在心理がいかに強いのか、いまさらのようには思い知ったわけであった。

このように、菅君の選挙が実質的に大勝利であっただけに、将来的視点にたてば、きわめてむづかしい局面を迎えたというのも事実なのである。課題が少なくとも五つある。

第一に、政治は絶対に遊びではない、七万とって大成功だったのだからこれでよしというものではない。菅君と彼に献身したグループ諸君は、私をふくめて新しい政治をきりひろくするために、命のある限り闘い続けるということを国民諸君の前に約束したのだから、スタートをきった以上、後退は許されない。さしあたって今年（昭和五十二年）の参議院選挙をどうするのか、それがすめば恐らくや衆議院選挙がまたやってくるし、地方選も近づいてくる。どういう態度で七万票の期待に応

えるかが真剣に討議されなくてはなるまい。

第二に、菅君の決断によって東京七区の政治不信族の食欲は満たすことができた。しかし、全国民レヴェルにおいて今後どのようなアタックが可能なのか、グローバル・レヴェルにおいて新しい政治勢力をどのようにして組織化するかという課題がのこる。七万票の重みは、「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」がフワッと集まってフワッと消えてゆく集団では許されなかったことを、繰り返し銘記しておく必要がある。

第三に、それだけにはつきりした政策理念と政治展望を固め、それに対する理論武装が必要になってくる。革新無所属というのはやさしいが、保守革新の差はなにか、自民・反自民なのか、資本主義対社会主義なのか、このところを明確にするとともに、無所属をうたう以上、他の革新政党と政治理念においてどこが違うのかをはっきりとだしてゆく必要がある。

第四は、市民概念の明確な規定である。市民という言葉はどボビュラーなわりに、正確に内容がつかまえていないものはない。いまだに、市民とは都市在住者、農民に対する概念といったような、通俗理解が横行しているのが残念ながら現実である。正確な市民概念を一般国民に、どのように理解してもらおうのかという努力も、わかりきったこととしてみすててしまいうには日本の現状はおくれすぎている。

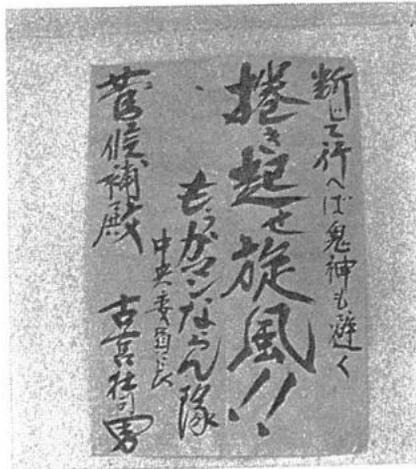
第五に、市民層がいま具体的に求めている個々の要望はなんなのか、それを革新無所属の立場で一步一步実現してゆくためのスケジュールとプログラムをどうするのかといった、よりつめた討論も必要になってくる。総論はわかるが各論がなんと頼りないというのは、国民の期待にそうこ

とにはなるまい。

以上、七万票の重みを敵陣にうけとめればうけとめるほど、この五つの課題は早急に結論づけられなくてはならないことである。

幸いに、菅君の選挙を闘った諸君は、若々しいエネルギーにみちあふれている。選挙ボケは一月くらいで卒業して、明日のために真剣な討論を繰り返してほしいと強く願う。

(『シビルミニマム』第31号)



ハガキや電話による激励も相次いだ。

「君よ、再び起て!」——もうガマンならん隊 古宮待男

心より菅直人君の御当選をお祝い申し上げます。惜敗した君にこの言葉は皮肉のようですが、決してそうではありません。君の惜敗は出鱈目な現行制度の結果であって、僅に四万五千票台で当選した者のあることを知るとき、君の得票は上位当選のものであるからです。

ご承知の通り、私はロッキード疑獄発覚以来、真先に糾弾ののろしを上げ、卑劣な児玉ら右翼から命を狙われながら今日まで戦い抜き、六月から全国キャラバンを決行して世論の喚起に一役買

ましたが、選挙戦に参加し幾多候補の政見を聞いたが、そのスケールの小さいのに失望したものです。

国会議員は断じて村会議員や町会議員ではないのです。それは一国の国政に直接参画し、その結論と抱負は一国の運命を決定するものであって、どこに橋をかけ、どこに道を通し、どこか駅前自転車置場を整理すると言ったことは地方議員に任せておけば宜しいのです。

古語に「仁者治山、賢者治水」と言う。所謂、治山治水ですが、国会議員は水の出る山を治めるべきで、その山から出た水をどちらに引き、どのように利用するかは地方議員や官僚が為すべき仕事なのです。

ところが最近の代議士は小粒で、スケールが小さくなり、多様化した大衆の無制限な欲求に振り回されて、ゴミのことや自転車置場の世話、即ちドブ板代議士が氾濫したのです。その結果がこの行き詰った日本の現状であり、道や橋の世話の上手な土建屋たる田中角栄が当選する日本になったのです。

このような将来性のない日本の政治を甦らせる為には、日本の政治を木偶の坊代議士の手から私たちの手に取り返さねばなりません。その第一歩は先づ「選挙を市民の手に」取り返さねばならないのです。

これを敢然と実行したのが貴方だったのです。そして三バンなき貴方がゼロから出発してアッと一瞬間に当選に足る清く美しい大量得票をなさったのです。

この貴方、そして貴方を支えたグループの努力の姿は時恰も世紀のロッキード総選挙だっただけ

にその意義は極めて大きく、真の国会議員像を求める国民大衆に、そして真の愛国の熱情を抱き徒手空拳出馬を期する幾多有能な人材に限りなき希望と活力を与えたのです。この見地から次期衆院選にはこんど貴方を支持した方々の為にも是非再出馬すべきです。

『シンビルミニマム』第31号

## しばらく自分の生活に戻りたい

やれやれ終わった

仲間から候補者を立て、カンパとボランティアで行ないます、という今回の選挙であったが、選挙というものはやはり、異常とも思える興奮とエネルギーの集約を生み出すものである。この一二月の生活は、候補者の菅はもちろんのこと、運動員の場合も、日常的とはいえないものであった。

多くの運動員は、選挙がこんなにもしんどいものとは思っていなかったらしい。中盤を過ぎたころから、どの顔にも疲労の色が濃くなり、投票日までエネルギーが続くかと不安になることもしばしばであった。しかし、終盤になってから、運動に対する反応が強まってきたこと、マスコミの取材・報道の姿勢が変わってきたことなどが支えとなり、さらに、協力的な新聞記者から、支持率約九十一％という調査結果を聞かされると、がぜん空気が変わり、そのまま最終日まで突っ走ったというのが実感である。

したがって、投票日がきたときの運動員の気持は、「やれやれ終わった。しばらくは自分の生活に戻りたい」というのが正直なところであった。というより、それぞれが自分の仕事をかかえたポ

ランティア・ワークであるため、選挙期間中はかなりの無理を強いられてきた。だから、できるだけ早く、それを取り戻さなければならないという気持が、それぞれの胸にあったのだろう。

候補者皆も、同じであった。彼は約束通り一週間後の十二月十三日から職場に復帰した。おそろく、候補者の中で最も早くもとの仕事に戻った一人であったろう。「ことがすめば、もとの生活に戻ることが大切だ。市民運動なのだから」菅はそう思っていた。

## それぞれの運動

こうして、私たちの戦いは一応の幕を降ろした。運動員の参加の動機と結果への意味づけは、それぞれ多様なものであった。私たちは思想を、イデオロギーを問わない。そこに問題があり、それに問題意識を感じたら、その時から運動が始まる。それを共有できればいい。そこから新しい状況が生まれることを期待している。参加者は自由な意志に基づいて自由な参加の形態を選ぶ。それが市民運動だと思う。問題意識が先にあり、それに共感した人々がグループを形成し、運動が展開される。だから、参加の形態も人によってマチマチであった。

十二月五日と十二日の反省会で出た意見も、実に多種多様なものであった。参加民主主義をめざす市民選挙の記録の章を終えるにあたって、その様子をかいつまんで述べてみたい。それが私たちのグループの原点だと思うからだ。

反省会は、選挙事務所の一室で行なわれた。参加者は、二日間合わせて延べ七十五人。長時間にわたったため、人の出入りが激しかったが、狭い部屋は終始熱気に満ちていた。私たちは、まず、

どのようなきっかけでこの選挙に参加し、この場に集うこととなったかについて話し合った。中西（会社員）「三鷹でパンフレットをもらい、新鮮でいいことを言っているなあと思った。前から何かやってみたいと考えていたので、これを機会にこれからも手をつないでいきたい」

西村（学生・21歳）「街頭でビラをもらい、ちょうど学校の宿題がビラの内容と同じだったので、皆さんにインタビューに来た。それがこの運動に参加したきっかけになった。みんな自分のことで精一杯の時に、こういう運動をしている人たちと会えて感激だった。政治は自分からかけはなれたものだと思っていたが、運動を通じて身近なものになってきた。ただ、ビラまきをしていて、政治に無関心な人が多いのを痛感した」

町田（会社員・27歳）「立会演説会で皆さんの話を聞いて、共感するところが多かった。今日、はじめてグループの会合に参加してみたが、みなさん楽しそうで、いいグループだと思う」

赤羽（学生・20歳）「市民センターに顔を出しているうちに、今回の選挙の話聞いて自分から参加した。授業をさぼってやるほど楽しかった。今回の経験を通じて、民衆が歴史を動かすということを実感できた。今後もぜひ続けていきたい」

稲木（学生）「大学の研究室で、先生が一所懸命ポスター貼りをしているのを見ているうちに、それを手伝われるはめになった」

赤木（弟）（学生・24歳）『シビルミニマム』をとっている母から噂を聞いてきてみたら、人手がないのに驚き、ちょっと手伝ったのが最後までやることになってしまった。ぼくは昔から市民運動には批判的でしたが、ことが始まってしまっただけからは、もうやるしかないと思腹がきまった。

このグループは、一人ひとりがその生活の範囲内で活動しながら人間関係を広げていくところに特色があるが、逆にいえば、それが限界でもあって、もっと論理的な議論と、その上での一致が不可欠だと思う。そういう意味では、この運動は今後、変わっていかざるを得ないと思います」

赤木（兄）（学生・26歳）「弟がここに参加しているので、つられて参加した。ポスター貼りを含めて、五、六回事務所に来た。面白かった。何につけ、参加していくという姿勢は必要だと思うし、私はこの選挙には半身でしか関わってこなかったことを多少反省している」

玉置（学生・21歳）「先輩がいたので、陣中見舞いに来たら、証紙貼りを手伝われ、いつの間にか参加していた。とにかく何でも自分でやれるところがすばらしい。アルバイトだと金にはなるが、やりたいことをやるというわけにはいかない。参政権というのは、投票をすればいいというものではなく、自分から働きかけていくことが必要だと思う。ここはそれができる場だった。腐れ縁ができたし、今後も一緒にやっていきたい」

北村（学生・20歳）「先輩がいたので参加した。市民運動に共感を感じていたので、理論面での討論はともかくとして、運動をやりました。市民運動の一形態として、今後も発展させていきたい。僕らの場合、選挙を自己目的化していかないという意味で、選挙屋とは違うと思います」

松木（学生・20歳）「大学生活の中で、最初で最後の総選挙だと思い、一発やってみようと思った。体を張って、自分でかかわってみなければ何もわからないと思い、ここに決めました。このグループは、大学の授業にも出られるし、自由なところがいい。」

「カンパとボランティアによる選挙」ということを、この選挙では前面に打ち出していたが、必ず

しも浸透していなかったため、カンパの金を受け取るのが、物もらいみたいでつらかった。運動をやってみて、大義名分はここにしかないと確信するに至りました」

竹内（学生・20歳）「選挙をやってみたくらいだと思っていた。公示直後ポスター貼りを二日間手伝ってから、ずーっとやることになってしまった。うまい、うまいとおだてられ、その気になってやっていたら心理学の試験を落としました。ピラマキをやってみて、世間がシラケているなど感じた。選挙カーにのるため毎日規則正しく六時に起こされるといふ緊張の生活が続いたので、むしろこれからの生活が心配だ。今後も一緒に活動していきたい」

一方、以前からこのグループに関わっていた仲間も、今回の選挙について次のような感想をもらった。

金子（学生・24歳）「市川さんの選挙を手伝ったのがこのグループを知った最初です。今回の選挙をやる必要性がよくわからなかったのですが、今回はなるべく乗らないようにした。外から見ていると、みんなよくやっているな、という感じで楽しかった。卒論の関係で選挙のアンケート調査をやったが、その結果をみると浸透度合いがたいへんよくわかった。やればやるだけのことはあるという感じがする。この運動は必要なことをやっていくという運動だったと思います」

安江（学生・22歳）「原因を作れば必ず結果が出る。選挙は楽しかったし、自分をトレーニングすることができた。仕事があると人が集まるといふ点で、選挙はいいイベントだ。参議院を含め、今後は保革のシーソーになり、政治は面白くなると思う。体の具合が悪かったが、政治が好きなので、相当無理してやってしまった」

市川選挙から参加しているが、あの時の百九十二万票はアンチ票だったと思う。今度の菅の七万票には、新しい政治勢力への期待がある。五党体制は必ず崩壊する。われわれはこんな状況のトップを走っていきたい」

稲葉（会社員・29歳）「菅さんのことは大学のころから知っていたが、このグループの一員から立候補の話聞いて驚いた。

そして自分でも出来る限り、一所懸命やろうと決意した。選挙カーの運転を中心にやったが、誇らしく楽しかった。

こういうグループから市民党が生まれる可能性はあると思うが、もっと組織が大きくなった時、これまでのように、仲間うちだけでやっていけるのかどうか。僕はかつて八百人の組合の委員長をやったが、その時はしんどかった。それに比べる、今回はともかく楽しかった」

宗像（会社員・29歳）「この選挙は、趣旨としてはもっともだと思ったが、気分的には、もう一つ乗れなかった。しかし、少しずつ手伝っているうちに、どうしてもやりたくなってしまった」

吉田（会社員・29歳）「長いこと、このグループと一緒に運動をやってきた。公示までは一所懸



みんなて開票速報を見た。

命やって、あとは手を抜くつもりでいたが、結局最後までやることになった。やはり、ちょっとしんどかったという感じだ」

ところで、地域内で積極的に支持してくれた人々は、私たちを次のように見ていたようだ。

稲村(会社員)「私はいわゆる焼け跡派です。選挙前に『シビルミニマム』が送られてきて、この運動を知りました。七区には投票したい人もいないので、生まれて初めて棄権しようと思っていました。が、この運動を知って、これは一つやってやろうと思いました。ここでは今までの運動とは違う感じの人と会えてたいへんおもしろかった。何百枚かのハガキを書かされました。ああ、疲れた。この運動に関しては、とにかく大衆の前で物をいった以上、体を張ってでも責任を持たなければならぬと思う。七万人が納得する活動をしてもらいたい。」

今まで私は、革新の選挙運動の裏を見てうんざりしていた。彼らは人間を人間として見ていない。その裏返しがこの運動だったと思う」

阿部(会社員)「パンフレットを読んだ人からは、たいへん多くの共感を得た。私は市川さんの市民センターに参加してきたので、今回、市川さんの応援がなかったのは残念だった。今まで棄権したことはなかったが、今回はさすがに投票する気にはなれなかった。菅さんの立候補を聞いてはつとした。それだけに当選しなかったのがほんとうに残念だ。市民生活に密着した問題はいっぱいある。これからの運動の輪を拡げてがんばってほしい」

鈴木(生協事務員・24歳)「小金井市議の佐野さんを通じて、この選挙に放り込まれた。菅さんがどういう人か、まったく知らず、事務所でポスターを見てはじめて知った。田上さんから名簿と

電話を預けられ、何をやっていいのかわからないまま電話を担当した。事前の打ち合わせもなく、ピラを見ながら自分で考えてやらなければならず、たいへんな所へきてしまったと思った。

選挙というのは、すごいエネルギーを集めるものだ。何も知らない人が、どんどんやってきては選挙を手伝うようになる。このエネルギーを、選挙後もバラバラにしないで、七区のいろんな協力者と輪を作り、運動を拡げていきたい。状況の変化に対して、確実に問題を提起していくことが必要だ」

鈴木(会社員)「私は昭島に住んで三年、典型的な浮動層だった。友人から電話で、菅さんを応援してくれといわれ、ハガキを百枚ほど出した。しかし、昭島では三千票しかはいらなかった。非常に残念だ」

相良(主婦)「みなさんにひとこと、ご苦労様といたくて出てきました。西川さんから話を聞いたのがきっかけで、自発的に活動できたのがうれしい。呼びかけた人たちが、一人残らず共鳴してくれたのも、これまでにない経験だった。私は開票立会人もやったが、あまりたくさん票が出るので、私はもちろん、他の政党の人たちまでも不思議がった。パンフレットの出来も良かったし、とにかくいい選挙だった。これからの活動を見守っていきたい」

#### 理想選挙でも勝てる

十二日の二度目の反省会では、次のような意見が出た。

西川(主婦・元市議)「理想選挙でやると落ちるといふジンスクスがあったが、みなさんが市川さ

んを推し出してから、理想選挙でも当選するというムードが出てきた。最初、私は菅さんを知らなかった。小金井市議の佐野さんから、無所属の票がどのくらいあるか知りたいたいと思わないかという話があった。私は小金井で無所属の市議をやっていたので、その弱さを十分知っていた。だから、自分の息子が立ったような気持ちで、小金井の無所属を結集してみようと、思い切りやった。百票ぐらいい集めた。今でもポスターが部屋に貼ってあり、みんなこの人に入れたといってくれている。ポスターの威力は大きかったと思う。この力を結集し直して、運動を続けてほしい。どの新聞も好意的に取り上げており、この次やれば十萬票は超えると思う」

古宮（もうガマンならん隊）「右翼に命を狙われながらキャラバンを続けてきた。選挙中にも、角柴の新潟三区に乗り込んで、革新のマイクで私の主張を繰り返してきた。政治を人類に取り戻すために、菅さんにぜひ再出馬してもらいたい。」

五十一歳以上の人間に、ロッキード事件の責任があると私は思う。きみたち若い世代の力に大いに期待している」

#### やればやれるもの

一方、私たちのグループで長らく一緒にやってきた仲間が、次のように表明した。

宮道（大学助手・29歳）「選挙をやるという話が出た時、到底無理だと思った。しかし、終わってみて、やればやれるものだなあと感じた。市民常識を掲げて聞ったが、このグループに参加した人はあまり常識人ではないのか。常識では考えられないようなことをやってのけたの

だから」

円山（学生・24歳）「このグループとは、もう六、七年のつき合いになる。いつも、おもしろい話があるからこないか、という電話がかかってくる。常に甘い話ばかりで、とてもできそうにないと思うことが多い。今回もそう思い、話に乗らないつもりで断わった。ところが、渋谷でぼったり片岡さんに会って、ポスター貼りだけでもといわれ、とうとう今日までできてしまった。

市民運動は、たいへん運営が難しい。たとえば、ここに参加した人を新しいテーマでどう引きつけていくかといった問題がある。このグループは、やや選挙のやりすぎという感じがあるので今後、選挙屋にならぬよう注意していく必要がある。しばらく、自分の生活に戻りたいと思う」

福田（教員・27歳）「だいぶ前から食品問題の勉強会と一緒にやってきた。選挙というのは運動の場を拡げていくという意味で、大きな力を持っていると思う。たとえば、昭和五十年の武蔵野市議選では地域と密着することができた。

こういうふうに、選挙を次から次へと組めるのも、シビルミニマムなどを中心に運動を継続してきた成果だと思う。

選挙というのは、隠された能力をひき出せるという意味からも、参加した人々にとって、良い経験になると思います」

小山（大学研究室・27歳）「もうずいぶん前からこのグループにかかわってきました。現在は資金稼ぎとしての学習塾の面倒をみています。

選挙を振り返ると、まあこんなものじゃないかと思う。市民運動といいますが、サラリーマンに

とってほしいへんきびしい生活だった。このグループのサラリーマンは、ほんとうに良くやると思う。だけど、学生の手伝いがなければ、とてもここまでではできなかった。運動も徐々に大きくなってきて、市民常識だけでは通らなくなり始めているのではないですか」

田上（選挙事務長・26歳）「今考えるといろいろ勝手をいってうらまれたこともあったと思う。事務長という大切なポストをやらせてもらったのに、その責任を十分果たせない面があった。しかし、みんなの協力で何とかやってこられた。感謝している。このグループのとりえは、自分でやりたいようにやれることだと思う。一番の反省点としては、候補者がいちばん選挙に対するイメージを持っていたため、本来事務長が判断すべきことを候補者に持ち込んでしまったことだ」

片岡（会社員・30歳）「状況としては、既成政党と新勢力との闘いはここだけだった。しかし、社会的には、マスコミも含めて新自由クラブを取り上げざるを得なかった。この一つの歴史的状況に対して、十分対応できなかったことに責任を感じている。やはり、できうるなら複数の選挙を用意したかった。

このグループの特徴は、自由にやれるネットワーク的な運動の拡がりである。この拡がりが既成の組織の政党に打ち勝つ大きな力になっていくのだと思う。私はこの選挙をやって良かったと思う。とにかく状況ができた時には、常に運動を提起していくことが必要だ。スタートにおいては十でしかなかった運動の力が、百の状況があれば必ず百に近づいていくものだ。しんどいことではあるが、今後もこれを繰り返すほかはないのではないか」

菅（弁理士・30歳）「やって良かったと思っています。今まで知らなかった人が、ここにも半分

以上はいるし、その他に自分が知らないところで動いてくれた人はたくさんいるでしょう。

これからのことは、まだ整理されていませんが、ともかくやってよかった、というのがすべてです」